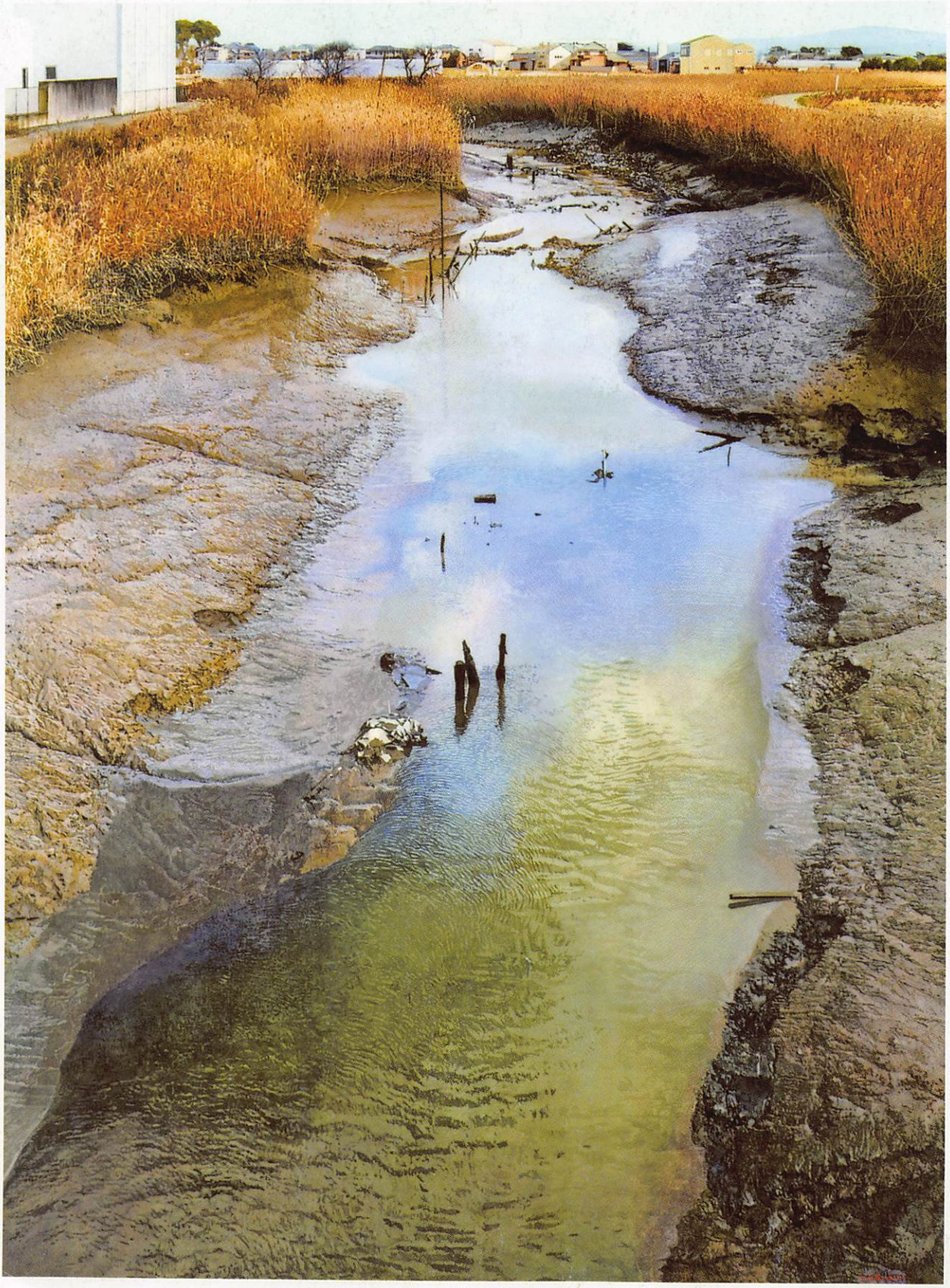
伝習館

東京同窓会会報

第18号 2018.1.1



「川の底」
池末　満・画

修学旅行生との交流会

フォト五七五「御花春秋」

伝習館ドリル

雲龍久吉物語

学ぶことを目指して

学年だより

表紙絵
「川の底」

高21　池末（いけすえ）　満（みつる）

第85回独立展出品作。久留米市三潴町在住。故郷大川市の向島、筑後川支流の早春の情景である。川の底深くまで映り込む深遠な空。幾重にも色を見せ、輝く川底の彩りは春近しの兆し、希望の光でもある。俯瞰、中段、遠方と3段に視点をとり、川と筑後平野の遠近感に深みを出している。

本頁の写真
「鶴味噌並蔵（赤レンガ蔵）」

撮影・石塚武美（高12）

大正時代に建造された珍しいフランス積みのレンガによる並蔵。

第18号　2018.1.1

伝習館

東京同窓会会報

東京同窓会本部より

平成30年年頭のあいさつ……会長　白谷　政則……2
はじめての開催、東京同窓会懇親会・東京同窓会総会の開催告知……3
平成29年度の修学旅行生との交流会について（現役生の感想含む）……4
学年幹事会の活動報告……6
東京同窓会決算収支報告など……7
賛助金ご協力状況報告……8
賛助金通信欄コメント……9

母校だより

北島館長あいさつ……10
進路実績、部活報告……10
伝習館ドリル　クイズの問題と解答……高21　北島　正常……11
フォト五七五　御花春秋……高2　小野　善睦……13

先輩・後輩より

自分史の一齣　―海外への旅―……高5　阿津坂林太郎……17
久しぶりに帰郷し3つの感動を……高5　下河　秀行……21
古賀繁一元東京同窓会会長にお会いしたこと……高10　内山　秀生……22
奈良に鳥の楽園！　上村淳之画伯を訪ねる……高14　高木　節子……22
青春を謳歌した楽しき10代……高20　髙巣　和登……23
学ぶことを目指して　～イーブンパーの人生もいいものだ……高21　千代島道生……24
郷土出身の第十代横綱　雲龍久吉物語……高5　下河　秀行……28
喜寿前祝同期会　イン柳川……高12　野片　義人……29

告知板

歌舞伎と長唄の会・水泳部・陸上部……30

新刊紹介

新刊紹介……30

学年だより

高志会（高4卒同窓会）……高4　渡邊　喜亮……31
高6回（昭和30年卒）「三稜会」だより……高6　石橋　修……32
「むつごろう会」喜寿の集い……高9　廣松　洋一……32
「くっぞこ会」……高12　小野アケミ……33
東京21会……高21　西原　正道……33

ふるさと瓦版

NHK大河ドラマ招致活動開始（柳川市）ほか……34
編集後記・原稿募集・事務局変更のお知らせ……36
池松博之、木村松峯の作品……37

東京同窓会本部より

平成30年　年頭挨拶

伝習館東京同窓会
会長　白谷政則

同窓生の皆様　明けましておめでとうございます。

皆様健やかに新年を迎えられたことと存じます。

伝習館東京同窓会では昨年二つの事を試みました。一つは皆さんご承知の通り親睦会を5月14日（日）に開催しました。総会を毎年やってほしい、真夏を避け気候のいい時期に、もっと安くできないかなど色々な声が寄せられていましたので、学年幹事会で検討し取り敢えず一度やってみようとなりました。経費節減のため事務局から全員へ一斉に郵送するのでなく学年幹事の方の連絡網により参加者を募ったので果たして何人集まるのか心配しましたが、結果は…私は二重丸だと思いますが皆さんは如何でしたでしょうか？

二つ目は学生の幹事を決めました。修学旅行生との交流会には大学生も毎年十数名参加しますが、一昨年の総会や昨年の親睦会には学生を含め若い人達の参加は有りませんでした。事務局から若い人への連絡がうまく出来ずにいましたが、これからは学生の幹事に連絡すればその前後の学年に伝わり、今後の東京同窓会行事に多数参加してくれると思います。

今年の総会は5月13日（日）開催し、講演は地元柳川で執筆活動をされている原達郎様にお願いしております。原様は柳川地方の歴史や九州ラーメン、オノ・ヨーコに関する著書もありどんな講演になるか楽しみです。地元で活動されているので、もしかすると皆さんの出身地の話があるかもしれませんので期待しておいて下さい。総会の実行委員は今年還暦を迎える高28回生を中心に恒例の郷土料理・物産販売等着々と準備を進めております。皆様お誘い合わせの上、ホテル・グランドパレスが郷土色で一杯になるよう大勢のご参加をお待ちしております。

伝習館は平成27年入学から一学年200名になり、平成29年度ついに全校生徒600名になりました。50年前の4割です。一年生は5クラス、二・三年生は6クラスですが県の方針は5クラス三学年ですのでクラスが増えた分先生方の負担が大きくなっています。このまま人口減が続くと近隣校との統廃合も考えられます。その対象とならない様に進学進路のみならず課外活動や部活にも力を入れ、生徒達の希望もありクラスを増やしたそうです。まさか伝習館が統廃合なんてと思っていらっしゃるかもしれませんが県にとっては筑後地方の片田舎の一学校なので安心できません。東京同窓会の交流会は課外活動の一環として大きく評価されています。また、地元を遠く離れた東京で何百人も集まる同窓会は母校と卒業生の強い結びつきの証しで、一人一人の参加が伝習館の存在価値を高めます。同窓会は誰かがやるだろうと傍観者にならず、皆さんの積極的な行動を期待します。

はじめての開催、東京同窓会親睦会

隔年開催の東京同窓会総会の谷間になる年、5月14日（日）ホテルグランドパレスにおいて「伝習館東京同窓会親睦会」が開催された。親睦会については、年配者から「隔年は永い。総会のない年に懇親会として集まってはどうか」との要望があり、「総会とは趣を異にし、気候のいい時期に気軽に集まり、親睦を深めてもらう会もあっていいのではないか」（白谷会長）ということで、高巣実行委員長の下、今回実現の運びとなったもの。

準備不足も懸念されるなかの開催だったが各学年幹事に呼びかけてもらい、160人近い卒業生が参集した。総会のように案内状形式ではなく、各学年幹事が直接呼びかけたことで反応もよく、「うちの代は総会より参加者が増えた」と話す幹事も多かった。正午に開始、白谷会長あいさつ、江﨑名誉会長の乾杯の発声と続いた後、すぐ飲食・懇談タイムとなったため和やかになるのも早かった。期別ごとにテーブルが設けられていたが、各人が気軽にテーブルを移動して旧交を温める。

会半ばには、10月に開催される柳川大同窓会の実行委員が登壇。金子英典実行委員長（39回生、夜明茶屋社長）から大同窓会へのお誘いと、立花宗茂公と闇千代姫を2020年の大河ドラマに実現するために招致会が県レベルで動き出した報告がなされ、この気運を押し上げるべく万雷の拍手が起きていた。郷土の勇士の姿をぜひ大河ドラマで見たいものである。

この後、じゃんけん大会でも大いに沸いた。親睦会では出身中別懇談、部活別懇談も予定されていたが、参加者は自由にテーブルを行き来し、個々の会話で十分に満たされた様子。3時間が瞬く間にすぎ、最後には金子実行委員長のリードで3つの校歌が歌い上げられた。締めに登壇した高巣氏からはこの日、次の東京同窓会総会がいつもの夏7月ではなく春の5月13日に決定したので、これまで以上の参加をとの呼び掛けがなされた。

21回生の皆さん

今年は5/13東京同窓会総会が開催されます！

伝習館東京同窓会総会のお知らせ

東京同窓会の皆様、今年は東京同窓会総会開催の年です。以前は暑い7月の開催でしたが、今回は爽やかな気候の5月13日（日）に行われます。300人近い同窓生がホテルグランドパレスに会し、会場のダイヤモンドルームは伝習館一色に染まります。最近の同窓会総会は若い人にも楽しんでもらえるよう、お楽しみ抽選会、アトラクションなど趣向が凝らされています。同郷の先輩、後輩とも交歓できるよき機会です。また郷土料理、地酒がふるまわれるほか、ふるさとの物産展には貝柱の粕漬け、しょんしょん、海苔佃煮など懐かしい郷里物産の売店も設けられます。どうぞお仲間（会員でなくとも伝習館にゆかりのある人なら可）をお誘い合わせのうえ、気軽にご参加ください。

◆とき＝平成30年5月13日（日）　午前11時～午後2時30分（予定）

◆ところ＝ホテルグランドパレス「2階ダイヤモンドルーム」

講演会（午前11時～正午）　講師　原達郎

福岡市民芸術祭文芸随筆部門・文芸小説部門市長賞受賞。九州ラーメン研究会代表。柳川観光大使、柳川ふるさと塾長。著書「白秋の食卓」財界九州社、「久留米ラーメン物語」九州ラーメン研究会、「オノ・ヨーコの華麗な一族」「ビクトル古賀物語」「柳川藩立花家中列伝」いずれも柳川ふるさと塾。

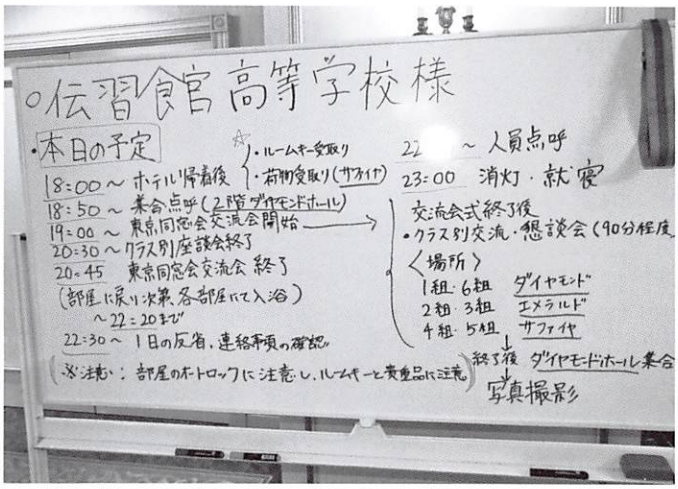
平成29年度修学旅行生と卒業生との交流会

9月11日（月）の夕刻、伝習館高校の修学旅行生（2年生）197人と卒業生（OB、OG）の交流会が宿泊先の早稲田リーガロイヤルホテル東京で開催された。卒業生の出席者は37名（うち大学生は13名）。今回は6クラス197人をグループ分けし、主に若い卒業生がリードする座談会形式で行われた。

生徒側からは各グループで質問事項が準備され、現役大学生や経験豊富なOB、OGが生徒たちの質問に答え、アドバイスしていく方式である。生徒からは高校生活や卒業後の進路について、東京での大学生活や就職に関する質問がなされた。

例を挙げると――。高校時については「先輩たちの高校2年時の高校生活はどうだったか。後悔しないために高校生のうちにやっておくべきことは何か」「伝習館生でよかったと思ったこと」「受験対策で必要なことは何か」「進路の悩み。夢を追うか、自分の適性を優先すべきか、経済的なことを考慮すべきか」。

大学に関しては「なぜ東京に進学しようと思ったか、不安や家庭からの反対はなかったか」「東京での一人暮らしは大変か。生活費や学費はどれくらいかかるか」「学生として一日をどのように過ごしているか」など。



就職では「就職を東京にした理由、職業はどんな基準で選んだか」「大学で学んだことは将来の夢につながっているか」「今どのような人材が求められているか」「社会人として生きていくための力は何か」。

高校2年生の後半は進路に向けて目標を固め始める時期で、希望と不安が入り交じった様子がうかがえる。上京するとしても将来への希望が持てるのかという不安が質問に表れている。

交流会で生徒たちは納得のいく答えが得られただろうか。インターネットのベストアンサーのような回答とは異にし、最近の卒業生の実感のこもった回答、アドバイスは生徒たちにはよく響いたのではないか。中には高校生を圧倒するパワーで孫ほどの生徒に熱くアドバイスを送るシニア先輩もいたが、これも後輩思い・母校愛の発露、期待のエールと思し召しあれ。

交流会の生徒たちの感想が寄せられているので、以下に紹介します。

修学旅行生より

〈印象に残った言葉・話〉

・勉強は「基礎を固めること」「自分の得意科目を作ること」が大切。
・3年生の大運動会後の勉強への切り替えが大事。
・伝習館を卒業したことを誇りに思う。伝習館の文武両道の精神が好きだ。
・求められるのは「人とたくさん話せて、温かい気持ちで相手を理解しようとする人」である。
・方言は愛嬌、あえて方言を使って自分を主張する。
・百芸に興味をもって一芸を極める。
・知識を知恵に変える
・自分が何をやりたいかが大切。
・高校時代はどちらかというと、落ちこぼれの方だったが、自分のやりたいと思ったことは、決して諦めなかった。
・今はまだ可能性がたくさんある。いろんなことにチャレンジしよう。やれることをやったら、すぐにまた切り替えて、物事に取り組もう。自分の将来は自分で決めることが大切
・今はやりたいことがなくても、何かをやりたいと思ったときは何でも諦めずにやってみる。そうすれば必ず何かを得ることができる。

〈生徒たちの感想〉

（1～6組のクラス順）

・自分と同じ高校を卒業した先輩方から話を聞くのはとても新鮮で楽しかったです。様々な年代の方々の話を聞いて印象に残っていることは「自分が今いる周りだけを見るのではなく、視野を広げることが大事だ」ということです。今回の東京同窓会の先輩方から聞いた話はためになる話ばかりだったので、それを今後の高校生活にしっかりと生かせるように頑張りたいと思います。

・先輩方のお話を伺う中で、段々と伝習館で学んでいることに誇りと自信を手に入れることができました。先輩方の経験を参考に、そして糧として、自分の志望校に向けて勉学に励んでいこうと思います。そして、機会があればぜひまたじっくりお話したいです。

・最初はとても緊張していましたが、先輩方が優しく接してくださって、とても楽しくお話を聴くことができました。高校の時の経験談や大学受験に向けての勉強方法、また、大学生活や東京のことなど、様々なことを教えていただき、今自分がやるべきことが改めて分かり、大学への憧れがより強くなりました。とてもいい経験をすることができました。

・今までは九州内の大学しか考えていなかったが、東京ならではの良さや、できることの違い、視野の広がり、自分を高めるチャンスの多さなどを知り、関東の大学も調べてみようと思った。

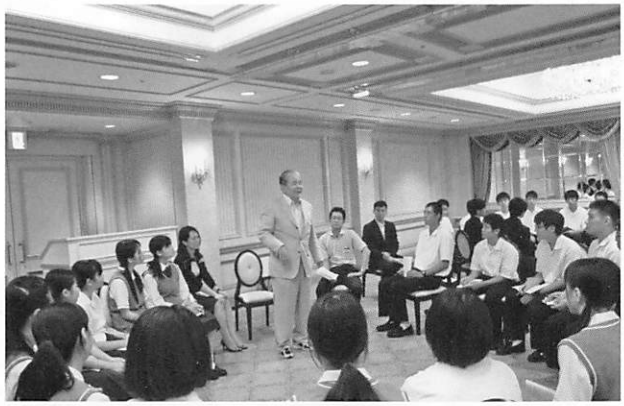
・しっかりとした目的や志を持って大学へ行くことが大切であること、その大学へ強く行きたいという気持ちが勉強への意欲を高めることがよく分かった。自分の憧れている大学に進学した先輩方のようになりたい、今の自分を変えなければならないと感じた。

・企業において出世したり、成功されたり、夢を掴まれた先輩方が、かなりの努力と失敗を繰り返しながらも逃げずに前を向いて歩き続けたからこそ、今の結果があるのだということを知った。少しくらいの困難でくじけている自分も先輩方のように諦めない心を持って、前へ進んでいきたい！ 今できることを必死にやって残りの高校生活を充実させたいと強く思った。

・「与えられる勉強」をやらされていると感じている内は成長できない、という言葉が胸に響いた。今までは勉強を自ら積極的には行わず、マイナス思考で行っていた。これからは何事にも積極的に、自ら考えて行動できるようになる。「心の積極性」を実践できる大人になるよう心がけていきたい。

・自分をしっかり持つこと、人との出会いを大切にすること、いろいろなことを学びました。私は流されやすかったり、ネガティブになりがちですが先輩方のお話を聞いて自分に自信を持って生きていこうと思いました。

・東京に住んでいるからこそ、伝習館の卒業生であるからこそ聞けたお話が多くひとつひとつが刺激となりました。夢を決めるために情報を入手したり、いろんな所に足を踏み入れていくというアドバイスを参考にしていこうと思いました。みなさん伝習館への誇りが



すごいなと思いました。私も将来立派な大人になれるよう勉強を頑張りたいと思いました。

・伝習館出身の先輩が東京に出て活躍されているすごい人ばかりで、改めて伝習館生であることを誇りに思った。

・どの世代の先輩も「目標が大切だ」と言われていた。私自身も目標を明確に定めて、それに向かって努力していきたい。

・部活はやっておくほうが良いという方が多くて、心強かった。自分はなかなか勉強との両立ができず、部活を続けようかと、悩んでいたが、頑張れって背中を押されたように思えた。予想以上にやる気が高まり、良い交流会だった。

・いろんな人とコミュニケーションすることの大切さ、自信をもって行動することを教えていただいた。これからの生活に活かしていきたい

・勉強へのやる気が出ないとき、成績が思い通りに伸びないとき、恋をしたらいい！って言われたことに、とても驚きました。でも確かに！って思うところがあり、納得できました。さすがだな、と思う点も多く、あっという間の交流会になりました。

・一度決めた夢に向かって突き進むという強い信念があることが共通しているのだと思った。また、失敗したことはただ失敗に終わるわけではなく将来自分がすることの良い経験となるということが分かった。

・東大医学部に進学された先輩でも「生活をしていく中で自分は知識が足りていないと感じることがある」といわれていたことを聞いて、勉強とは受験やテストのためにやるものではなく、大人になって社会に出て様々なことに対応できる人間になることではないかと思うようになった。

交流会OB参加者（敬称略）

中学55 江崎和夫
高校3 酒井清行
原田万紗子
高木節子
椛島正司
髙巣和登
白谷政則
21 西原正道
北島正常
高田健二
樋口貴美子
23 高橋圭介
志牟田美佐
37 石橋泰光
27 江口リサ
高橋徹
39 石橋美和
古賀智法
吉武加奈
55 龍幸宏
54 松尾晴奈
武下優子
藤木将
松岡龍太朗
40 ※佐藤公治
※中尾美貴子
※吉岡和政
65 ※池田真由
66 ※河村幸輝
※高井良健史
67 ※村上優太
※亀崎康慈
※松尾康平
※大坪史佳
※平田佳織
68 ※井上剛
※中村皓太郎
合計37名
（※印は大学生・院生）
＝敬称略

学年幹事会の活動報告

高21　白谷政則

東京同窓会の一年（H.28.10～H.29.10）

〈伝習館関係〉

H.28.10／8　**伝習館大同窓会**（柳川）
66回伝習館同窓会
あいにくの雨で御花の庭園が使えず対月館で懇親会

H.28.11／13　**編集委員会・学年幹事会**
・修学旅行交流会報告
・親睦会の開催について
・会報17号発行最終確認
・会報発行の為住所確認
・福岡県人会・柳川市からのお知らせ

H.28.12／23　**忘年会（有志）**
初めて開催する親睦会の規模・準備打ち合わせ　決起集会

H.29.3／25　**学年幹事会**
・会報17号について感想
・親睦会準備進捗状況
・名簿修正依頼（会報戻り分）
・賛助金の入金状況

H.29.5／8～13
親睦会参加者一覧入力、作成
人数の最終確認、ホテルに連絡

H.29.5／13　**東京同窓会親睦会**
学年幹事を通しての連絡だったので積極的な学年は10名以上、そうでない学年は0又は1～2名と大きな差がでた。合計157名参加

H.29.6／5　**伝習館高校訪問**
修学旅行生との交流会の日程と質問要項等の打ち合わせ

H.29.7／29　**学年幹事会**
・親睦会収支報告・感想
・交流会の受け入れ準備状況
・賛助金の入金状況
・H.30　東京同窓会総会
日程／実行委員選出
講演会の講師依頼
・会報18号進捗状況

H.28.9／11　**修学旅行生との交流会**
別紙に掲載

H.29.10／7　**伝習館大同窓会**（柳川）
第67回伝習館同窓会
全国から800名集まり大盛況
毎年若返っているように感じるのは自分が年取ってきたのかも？

〈県人会関係〉

東京福岡県人会　同窓会協力委員会
20校30名で年6回定例会議を開催

H.28.11／26　**同窓会役員交流会**
白谷会長、高巣常任幹事参加

H.28.2／6　**就活を応援する会**
佐藤公治君（東京農工大修士1年）参加
就職活動の心構えや仕事内容についてセミナー。伝習館も3年続けて参加しているのでそろそろセミナーの講師を出すよう要望あり。

H.29.5／25　**東京福岡県人会総会**
筑後地区が当番幹事で、伝習館や柳川地方出身者20名、全体で400名以上出席

〈柳川市関係〉

H.29.1／14～15　於　浅草
まるごとにっぽん柳川フェアー
昨年、東京同窓会の会報に同封したチラシの影響が大きく、市の担当者も来場者が多くてビックリしたとのことでした。
今年も1／13～14あります。

NHK大河ドラマ招致企画
『立花宗茂と誾千代』
2020年の大河ドラマ招致運動
詳細は5月の東京同窓会総会でパンフレットを配布予定

平成29年度伝習館東京同窓会決算報告書

平成28年12月1日～平成29年11月30日　　単位　：　円

科目	金額	科目	金額
収入の部		**支出の部**	
賛助金（郵便局）212件	925,000	会報制作費一式（含発送費用）	1,041,588
賛助金（銀行）3件	20,000	資料、メール便等（発送費6回）	6,279
親睦会での受付賛助金　82件	199,000	会議室使用料（駒込地域創造館2回）	4,000
		会議（学年幹事会）雑費	7,560
		会議資料コピー代	7,386
		事務用品	2,340
		修学旅行交流会参加大学生交通費	13,000
		修学旅行交流会参加者懇親会補助	24,360
		福岡県人会就活を応援する会他交流会費2回	22,000
		伝習館大同窓会総会広告費	40,000
		伝習館東京同窓会懇親会補助	103,191
		郵便振込手数料	22,760
		印字サービス手数料、振込手数料	2,534
当期収入	1,144,000	当期支出	1,296,998
前期繰越金	3,053,910	次期繰越金	2,900,912
計	4,197,910	計	4,197,910

平成29年度伝習館東京同窓会親睦会収支報告書

平成29年5月14日　於：ホテルグランドパレス　　単位：円

支払先	収入	支出	備考
会費（7000円、5000円）	922,000		155名
賛助金	199,000		82名
ホテル　グランドパレス		976,120	宴会費用一式
振込料		216	
なんでも酒や　カクヤス		48,520	持込酒代
ローソン		335	領収書購入代
		95,809	賛助金に繰入
計	1,121,000	1,121,000	

【賛助金ご協力状況報告】

（平成 28 年 12 月 1 日～平成 29 年 11 月 30 日）　　年初早く発刊したいため 11 月末日〆切と変更しました。（氏名は右から順）

卒回	氏名
高 9	堤　泰光
高 9	木村博子
高 10	江口　武
高 10	井上紀子
高 10	高島早苗
高 10	大島喜代子
高 10	古賀雄次郎
高 10	大村平人
高 10	中村紀子
高 10	緒方信彦
高 10	古賀啓司
高 10	平野善行
高 10	松藤　清
高 10	松本英子
高 11	與田広巳
高 11	西田孝行
高 11	鶴　精三
高 11	秋永栄子
高 11	原尻満子
高 11	城島孝雄
高 11	久賀朝文
高 11	岡　辰彦
高 11	佐薙輝代子
高 12	甲木宏明
高 12	馬場敦子
高 12	峯本昭子
高 13	吉開義隆
高 13	田中利道
高 13	池口正徳
高 13	池末　洋
高 13	岡部彰邦
高 13	尾崎カツエ
高 13	甲木久美
高 13	西山照子
高 13	吉開正信
高 14	大村陽子
高 14	甲斐昌彦
高 14	境　サヨ子
高 14	今泉京子
高 14	稲田洋子
高 14	中ノ森重義
高 14	松岡健次郎
高 15	後藤民子
高 16	高椋正民
高 16	黒田タエ子
高 16	高柳陽子
高 16	水澤昭子
高 16	荒巻明美
高 16	沓掛純次郎
高 17	中島　功
高 17	龍　敏彦
高 17	宇木博巳
高 17	下吹越智佳子
高 18	古賀行夫
高 18	津留知子
高 18	中川紀代子
高 18	三沢百合子
高 18	石川　滋
高 18	山下京一
高 19	森田達雄
高 19	阿南マチ子
高 20	諸藤由美子

卒回	氏名
高 14	松岡健次郎
高 15	一木克子
高 16	田中清四郎
高 18	吉田シヅカ
高 19	正岡喜則
高 20	田淵　正
高 23	樋口貴美子
高 27	高橋圭介
協賛 1 口	
中 53	深町昌弘
中 54	武藤徳一
中 54	山崎清勝
中 56	高田信義
女 31	跡部愛子
高 2	増田勝彦
高 2	田中豊子
高 2	石橋慶孝
高 2	北原大薫
高 2	増田則久
高 2	池田國彦
高 2	石川栄三郎
高 2	吉川良平
高 3	臼井ヒロエ
高 3	古賀洋一
高 3	後藤一彦
高 3	松竹紀子
高 3	薗田麗子
高 3	高椋重夫
高 3	柳沢一彦
高 4	椛島啓之
高 4	今村啓爾
高 4	高須信治
高 4	福山恭輔
高 4	吉田佐紀子
高 4	緒方常子
高 4	高江茂子
高 4	富永たか子
高 5	原　タカ子
高 5	武田八重子
高 5	松永悦子
高 5	宮川政實
高 5	岸　洋子
高 5	高橋絹子
高 5	野口幹彦
高 5	阿津坂林太郎
高 5	今村　直
高 5	大藪則子
高 5	田尻充子
高 6	本間洋子
高 6	池田勝嗣
高 6	石橋　修
高 6	中村　充
高 6	森　清旨
高 6	田中　稔
高 7	原田　晃
高 7	宮地厚生
高 8	高石順子
高 8	中村清美
高 8	石貫タツ子
高 8	後藤　享
高 8	甲斐田義春
高 9	岩丸純芳

卒回	氏名
高 6	佐藤春美
高 7	福山さくら
高 8	入部一郎
高 8	川口　融
高 8	内田由美子
高 8	豊島黎子
高 8	與田武久
高 10	永倉素子
高 10	松藤俊正
高 11	伊藤勝久
高 11	樋口　守
高 11	近藤素子
高 11	木下淑子
高 12	小野アケミ
高 12	小畑妙子
高 13	進藤達実
高 14	高木節子
高 14	石橋俊一
高 16	金子　修
高 18	十時理展
高 18	緒方敬四郎
高 18	川口秀喜
高 20	岡　賢二
高 20	高巣和登
高 20	椛島豊子
高 21	西原正道
高 22	竜　美代子
高 24	大橋久代
高 24	山田直美
高 26	薗田利朗
高 27	江崎友大
高 27	藤木雄二
高 50	大橋　剛
協賛 2 口	
女 40	山田チテ
高 1	高石満之
高 3	村井タカ子
高 8	石貫タツ子
高 8	永倉正彦
高 8	樋口誠佑
高 10	東　辰子
高 14	鷹尾富士雄
高 22	北原富美男
高 27	松藤峯成
高 29	古賀宜明
協賛 1.5 口	
高 3	木村朱水子
高 5	家入智恵子
高 7	大藪成人
高 8	大村泰生
高 8	池田孝人
高 10	川口圭之
高 11	星野公代
高 11	龍　勝
高 12	尾田常昭
高 12	横山正和
高 12	加藤紘平
高 12	春口明美
高 12	中島義枝
高 13	山田孝輝
高 13	尾田義昭
高 13	池松　洋

卒回	氏名
協賛 12 口	
高 21	石川　俊
協賛 10 口	
高 2	江崎正直
	柳川ブランド推進室
協賛 7.5 口	
高 2	江頭孝夫
高 2	山下　武
高 14	濱尾淑江
協賛 5 口	
高 2	河野健一郎
高 2	小野善睦
高 2	松藤　惟
高 3	新谷弘之
高 4	渡邊喜亮
高 4	中川　彪
高 5	岸　栄洋
高 5	沖　美津正
高 5	田中礼二
高 6	菊次伸子
高 6	戸上軍治
高 6	木村峯子
高 7	中村奨佑
高 7	古賀日出夫
高 9	廣松洋一
高 10	内山秀生
高 10	古賀明美
高 12	相浦美香
高 16	椛島正司
高 16	山口淳子
高 16	三小田雅美
高 18	松藤由朗
高 18	満生英二
高 19	野口　昇
高 19	田中茂利
高 20	東　寛治
高 20	安永　保
高 21	師村尚子
高 21	白谷政則
高 21	北島正常
高 24	酒見和平
高 30	平木博文
高 32	濱武久司
協賛 3 口	
高 5	安藤祥介
高 7	龍　弘道
高 10	中島哲夫
高 18	平野　勇
協賛 2.5 口	
中 55	江口和夫
高 2	石崎知見
高 2	松尾哲夫
高 2	井上和子
高 3	西山　彰
高 4	高石敏男
高 4	荒井健之輔
高 4	石川清喜
高 4	溝田昌司
高 4	小野硯一郎
高 5	江口政司
高 5	中村義行
高 5	中村千常

卒回	氏　名
高39	小森由紀
高39	井口由美
高56	藤木　将
高56	松永恭平
協賛0.5口	
高11	永尾弘行
高18	井上頼子
高19	白谷房子
高20	石井ヤス子
高21	金沢保浩
高22	田島栄子
高23	下田真知子

（1口　2,000円）

卒回	氏　名
高32	石橋順二
高32	枝光桂史
高32	境　和晃
高32	深田佐登美
高32	咲村あかね
高33	梅崎茂光
高33	山田さと子
高33	石川桂子
高34	泉　孝子
高35	木村嘉香
高35	古賀ゆかり
高35	池上英次
高38	西田美保子
高39	金子千恵美
高39	小原博子

卒回	氏　名
高21	古賀健一
高21	田中英徳
高21	堀　明彦
高21	森　隆士
高21	千葉真利子
高23	武藤友次
高23	高田健二
高23	志岐光穂
高24	田中知子
高26	野口佳延
高27	山口米春
高28	吉開孝人
高28	中島真二
高32	一木亮之介
高32	大山　恵

卒回	氏　名
高20	近藤敬介
高20	塩田佳世
高20	井口ちづ子
高20	海東信子
高21	中島和彦
高21	蓮尾秀子
高21	石立曜子
高21	佐藤邦恵
高21	千代島道生
高21	石橋一晃
高21	伊藤信博
高21	今村國昭
高21	江崎和子
高21	柿野貴美子
高21	木村陽一

伝習館東京同窓会 賛助金通信欄コメント

高18　吉田シヅカ
子供の頃、お正月の初訪問客は男性でなければならない我家の決まりでお向かいの「みよちゃん」宅へ遊びに行けなくてお向かいの玄関ばかり見ていました。

高6　戸上軍治
会報誌を正月に読めるのが楽しみです。今回は特に小野先輩の夏目漱石と伝習館の先輩達と興味深く拝読しました。

高20　近藤敬介
白谷君、新会長就任おめでとうございます。

高33　石川桂子
毎年会報をお送りいただき恐縮しております。2017年4月転居の予定ですので、よろしくお願いします。

高2　増田勝彦
昨年久しぶりに柳川・母校を訪れ浦島太郎の気分を味わってきました。

高13　山田孝輝
いつも楽しく拝読させて戴いております。お世話して戴く方の大変さがよくわかります。

高5　松永悦子
有難うございました。楽しみに読ませていただきます。

高8　樋口誠佑
この払込は昨28年度分です。同級生に賛助金の協力をお願いをしていた自分が払い漏れをして、申し訳ありません。今29年度分は別に払込をしました。

高15　一木克子
高3村井タカ子先生は私達の小学校の先生でした。今時々先生を囲む会に城内小出身の友達と集まっています。

高21　師村尚子
東京同窓会会報は立派です。一昨年、出席させていただき素晴らしい出会いがあり感激です。

高4　荒井健之輔
会報17号落掌。編集及び発送といろいろご苦労様でした。このようにして同窓の輪が拡がっていくことを念じております。今年もよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

高8　入部一郎
道内在住の同窓会の方はおられませんか？又ご存知の方いらっしゃいましたらご一報を!!

高14　境サヨ子
毎年すばらしい広報有難うございます。

高6　菊次伸子
東京同窓会に初めて友人と出席させて頂きました。上京以来60年ぶり。みなさんと一緒に校歌、準校歌を大太鼓の力強い伴奏にのって斉唱、楽しかったです。この会をここまで盛会に維持してこられた方々に御礼申し上げます。

高23　下田真知子
いつも楽しく読ませて頂いております。

高14　鷹尾富士雄
兄貴の孫、野球部。勝ち負けより応援だけは負けないように!!

高3　西山彰
同窓会のお世話を頂き誠に有難うございます。

高21　白谷政則
東京同窓会を活性化するには賛助金が必要です。一口でも結構ですので、多くの皆様からの援助を期待します。

高5　中村義行
皆様の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

高4　渡邊喜亮
毎号の編集ご苦労様です。参考まで私見。①同窓会誌である以上、「学年だより」またはこれに類する記事を重点編集。肝心の写真も人物識別可能な程度に大きく。②ごく一般的な紙面を埋めるだけの読み物は極力減らす。③多数の参加者、寄稿者を心がける編集。たとえば払込票の短信（原稿）の投稿を勧める。④小野善睦氏の柳川、伝習館にまつわる漱石の記事は秀抜、17号の圧巻でした。この種の記事は今後大いに期待。皆さん編集に意見を！

高7　古賀日出夫
元気で頑張っています。

高21　千代島道生
4月に柳川に行きました。西鉄柳川駅が整備されていました。大きなホテルが有りました。でも人口減は気になります。

高4　溝田昌司
親睦会は体調不良で出席できませんが、ご盛会をお祈りします。

高9　木村博子
同窓会会報第17号ありがとうございました。賛助金をお送りいたします。

高21　北島正常
会報編集に携わり4年目。皆様の投稿がたよりの会報ですが、この通信欄コメントも活用を！近況をお寄せ下さい。（ただし、払込票の裏面は書き込み不可）

高12　小畑妙子
毎年いつもお世話様です。今後ともよろしくお願いします。

母校だより

伝習館高校　館長　北島　啓志

二年生の修学旅行の東京研修では、今回も東京同窓会の皆様には大変お世話になりました。同窓会の皆様と在校生の交流は、有意義で意義深い研修となりました。準備から当日の実施まで大変お手数をお掛けいたしました。改めて、心より厚くお礼を申し上げます。

平成三十年度から野球部の定期戦を明善高校と実施することになりました。その切っ掛けは、今年七月に高校野球地区予選（対香椎高校戦）で全校応援を行ったことからでした。試合には勝利することはできませんでしたが、多くの卒業生、保護者の方々も含め、伝習館高校が一体となった応援となり、一生懸命にプレーする選手の姿から、全生徒はもとより、球場で応援いただいた多くの方々と大きな感動を分かち合うことができました。これは生徒一人ひとりにとって、真に教育的効果は大なるものがありました。ご存じのように、両校とも藩校であり、また、両校とも平成三十年には新校舎が完成することから、話が進み、定期戦の実施に至りました。同窓生の皆様、どうぞ熱く力強い応援をよろしくお願いいたします。実施時期や球場等については、現在調整中でございます。

本校も将来、必ずや甲子園の土を踏んでくれるものと大いに期待しております。

充実した教育活動が実践できますのも、同窓生の皆様方のお力添えによるものと感謝申し上げます。今後とも本校の教育活動に対しまして、変わらぬご協力とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（伝習館だよりより）

平成28年３月進路実績〈H29.3〉

（　）内の数字は合格者人数

国公立大学合格者　108名

東京大（1）	大阪大（1）	九州大（12）	千葉大（1）
東京学芸大（1）	広島大（2）	鳥取大（1）	山口大（3）
徳島大（1）	愛媛大（1）	九州工業大（3）	福岡教育大（5）
佐賀大（25）（医学科１名）		大分大（6）（医学科１名）	
長崎大（14）	鹿児島大（3）（獣医学科１名）		高崎経済大（1）
九州歯科大（1）	福岡女子大（2）	北九州市立大（1）	

など

私立大学合格者　580名

慶應義塾大（1）	早稲田大（3）	明治大（8）	青山学院大（2）
中央大（2）	東京理科大（2）	北里大（1）	駒澤大（4）
芝浦工業大（2）	同志社大（9）	立命館大（23）	関西学院大（4）
関西大（6）	近畿大（13）	西南学院大（119）	福岡大（168）

など

準大学校合格者　３名

防衛大学校（２）（１次合格者63名）
海上保安大学校（１）

公務員合格者　４名

県職員教育行政（１）　県職員一般行政（１）　県職員警察行政（１）
市役所職員（１）

部活動実績

（平成29年４～６月）

陸上競技部　高総体南部予選
男子走り幅跳び　１位
男子800m　１位
男子４×100m　５位
男子４×400m　４位
女子1500m　６位
女子3000m　６位
女子やり投げ５位　県大会へ

サッカー部　高総体南部予選
７位　県大会へ

バレーボール部　高総体南部予選
女子８位　県大会へ

卓球部　高総体南部予選
女子シングルス・ダブルス　県大会へ
女子シングルス国体南部予選　県大会へ

バスケットボール部　高総体南部予選
男子　女子　県大会出場

弓道部　優勝弓争奪大牟田市近県弓道大会
男子個人戦　５位

バドミントン部　高総体南部予選
男子団体戦　８位　県大会へ

ソフトテニス部　高総体南部予選
女子個人戦ペア　県大会へ

弁論放送部
県高校放送コンテスト筑後地区大会
アナウンス部門　２位、４位、入賞
朗読部門　４位

伝習館ドリル

検定3択クイズ

母校・伝習館に関するドリルです。伝習館は1824（文政7）年、藩の開学から1894年、1894（明治27）年の県立移管から124年の歴史があり、また幾多の人材を輩出しています。卒業生として知っておきたい伝習館史を3択クイズ方式で出題しました。皆さん、どれだけ知ってる！

（ドリル作成・北島正常＝高21）

Q1 伝習館は1824年・文政7年、柳河藩の藩学として創立された傳習館が大元。この創立者である藩主は誰でしょう。

㋐立花鑑賢
㋑立花忠茂
㋒立花寛鑑

Q2 明治期に入り、公立中学伝習館のあと、立花寛治伯は有志と図り、私財を投じ、私立尋常中学伝習館を設立。この初代館長の名は？

㋐立花鑑茂
㋑立花政樹
㋒立花寛

Q3 校章は三稜をデザインしたものですが、三稜の精神を表す三つの言葉からなっています。この三つの言葉は次のうち、どれでしょうか。

㋐明朗・誠実・剛健
㋑仁・義・愛
㋒知育・徳育・体育

Q4 明治30年代はじめ、北原白秋（隆吉）は伝習館中学で学ぶ生徒でした。沖端にある生家の家業は何？

㋐造酒屋
㋑油屋
㋒醤油屋

Q5 伝習館の校歌（館歌）は中学時代から現在まで幾度か変わり、今は「星座よ輝け」が歌われています。この作詞者は誰？

㋐安藤正雄
㋑北原白秋
㋒佐藤春夫

Q6 医師として米国に渡り、大腸内視鏡のパイオニアとして世界的に名声を得たドクターは誰？

㋐自見健史
㋑木村弘
㋒新谷弘実

Q7 戦後、男女共学となった伝習館はスポーツにおいても全国の頂点に立つ活躍を見せます。日本一になった運動部は次のうちどれ？

㋐水泳部
㋑バレー部
㋒庭球部

Q8 野球部はあと一歩のところで甲子園出場を逃していますが、現在も健闘しています。伝習館高校野球部にはプロ野球選手となり活躍したOBがいます。次の誰？

㋐若菜嘉晴
㋑二村忠美
㋒立花義家

Q9 学者も輩出していますが、マルクス学者、天才的哲学者として名を馳せた学者は誰？

㋐森永毅彦
㋑木下哲郎
㋒廣松渉

Q10 名ボーカルとバンドを率いて数々のヒットを飛ばしたグループのリーダーも伝習館の出身です。その人の名は？

㋐内山田洋
㋑和田弘
㋒鶴岡雅義

伝習館ドリル解答

A1 ㋐ 創立者は9代藩主、立花鑑賢（あきかた）侯。傳習館は1824（文政7）年、柳河藩における藩士子弟の教育機関として新設、講堂に安東家所縁の孔子像が奉還された。傳習館の名称は論語学而篇の「曾子曰く、吾、日に吾が身を三省す。人のために謀りて忠ならざるか。朋友と交わりて信ならざるか。習わざるを伝ふるか」が由来。学んだことを習熟し、謙虚で反省も怠らないようにという戒め。この藩学では時節柄、蘭学、英語も採り入れられている。

A2 ㋑ 藩学を経て公立中学伝習館から橘蔭学館、そして明治25年（1892年）私立尋常中学伝習館に改称。初代館長は立花政樹。立花寛治伯が私学校創設にあたり、東大英文科を卒業後、山口高等中学校（現・山口大学）で教授を務めていた立花政樹を帰郷させ、館長に据えた。その後県立に移管したが、引き続き立花政樹が館長を務めた。

A3 ㋒ 校章の三稜のデザインは立花政樹館長が制定。人間関係が衝突するときは三角の角が相撃って火がでるように相争い、また和親するときは三角の辺がぴったりついて一線をなすようでなければならないという狙いがある。三稜徽章の三本は知育・徳育・体育を象徴し、三稜は仁・義・智、または智・仁・勇を表すなど、それぞれの時代に合わせ三稜精神は教育目標となった。のちに知育・徳育・体育は文武両道で発揮されることになる。明朗・誠実・剛健は現在の伝習館高校の校訓となっている。

A4 ㋐ 造酒屋。北原白秋（隆吉）は1885年（明治18年）、母の実家、熊本県の南関で生まれ、柳川の沖端で育つ。実家は江戸時代から栄えた商家で、当時は酒造業が中心。明治34年、沖端の大火で酒蔵が全焼し、家業は傾き、廃業。親、弟は東京の白秋を頼って上京した。

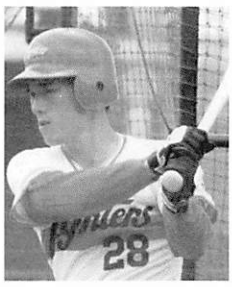
A5 ㋑ 北原白秋。「星座よ輝け」は伝習館中学館歌で、北原白秋作詞、山田耕筰作曲。長く採用された「伝えて習う」（佐藤春夫作詞、信時潔作曲）に替わり、現在は白秋作詞の「星座よ輝け」が校歌となっている。ちなみに同窓会等でよく歌われる「白雲なびく雲仙の」は中学時代の準館歌である。

A6 ㋒ 新谷弘実（しんや・ひろみ）氏。高3回卒。順天堂大医学部卒業後、渡米。世界で初めて大腸内視鏡によるポリープの切除に成功した、この分野の第一人者。米国ナンバーワン内視鏡医として10万例以上のポリープを切除。米でダスティン・ホフマンやスティング、日本でも元首相を手掛けるなど、著名人の厚い信頼を得ている。米胃腸内視鏡学会最高賞受賞。ニューヨーク栄誉市民賞受賞。

A7 ㋐ 水泳部 昭和26年、東西代表決戦となった高校選手権水上競技大会（神宮プール）で伊東高校を破り、全国高校の頂点に立った。東京同窓会会員の酒井清行氏は優勝メンバーの一人。当時1年生の古賀学氏は早大に進み、自由形百、二百で全日本トップクラスの活躍、メルボルン五輪に出場した。また8回生の開田幸一氏はローマ五輪の競泳リレーで銅メダルを獲得している。

3年生
緒方先生、横田
酒井、後藤
石橋、一郡
待島先生、大橋

A8 ㋑ 日本ハム ファイターズの二村忠美選手。大木町出身。伝習館高校から九州産交に進みドラフト3位でファイターズへ。打率2割8分2厘、13本塁打を放ちパリーグの新人王となる（1983年）。以後5年間2桁本塁打を放つなどスラッガーとして活躍した。



A9 ㋒ 廣松渉。戦後のレッドパージが吹き荒れる中、伝習館を反米ビラまき行為で退学処分となり、大検で東大に入る。独自の哲学体系を打ち出し、当代一のマルクス学者、哲学者として注目された。東大名誉教授。「今こそマルクスを読み返す」「〈近代の超克〉論」「マルクス主義認識論のために」「存在と意味」など数々の著作がある。同窓会会員の成清良孝氏の著書「廣松渉における人間の研究」には親交のあった廣松の人間的側面が描写されている。

A10 ㋐ 内山田洋。内山田洋は本名、内山田道生。高6回生。長崎でクールファイブを結成。リーダーとして、前川清、クールファイブを一躍スターダムに押し上げた。昭和44年伝習館高校体育館で柳川青年会議所らの招きで橘奨学金基金募集のチャリティーショーに「後輩のために」と出演している。

いかがでしたか。採点ランクは以下のようになります。
・10点 秀才です ・9～7点 通です
・6～5点 辛うじて合格
・4～3点 赤点、追試。頑張ろう
・2～0点 落第、やり直し

フォト五七五
御花春秋

575・高2／斜庵・小野善睦
書　・高6／松峯・木村峯子
監　修・高13／原田万紗子

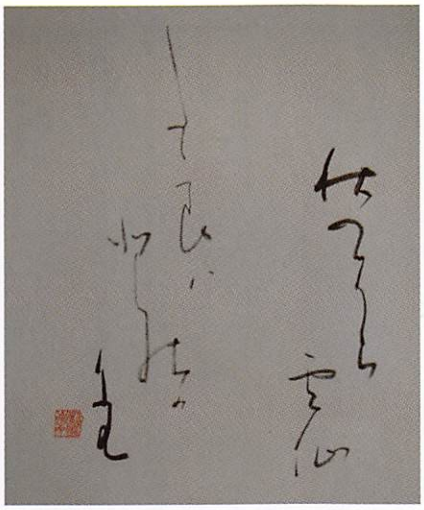
秋の空　雲仙多良は　殿が庭

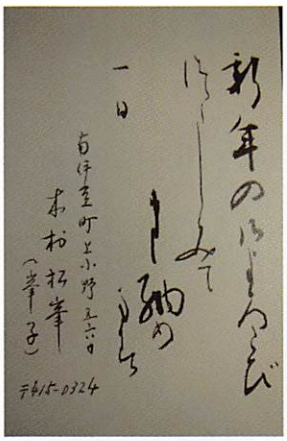
いづこまで　殿のお庭や　多良雲仙

松濤館4Fより
松濤園を望む

御花のホテル松濤館の4Fの部屋に通され、カーテンを開けるとアッと驚く絶景が展開した。写真には写ってないが、雲仙岳・多良岳もくっきり望まれた。

昔、へそくり山にあった柳川城の天守閣からも有明海を庭池と見立て、雲仙・多良を望む絶景を歴代のトンさんが愛でたに違いない。迷句が浮かんだ。松峯さんが色紙に書いてくれた。家宝だ！





余談だが松峯さんから頂いた今年の賀状も二百余枚の中の最高傑作の一枚だ。

写真で見づらいが、墨継ぎ・濃淡・連綿・全体のバランス等々、名筆を鑑賞して！

昔、柳河高女に助弘先生という書道の先生がいて卒業生はみんな仮名書きが上手いという歴史を残された。松峯さんもその系譜か？

―閑話休題―

出逢い橋　一羽の蝶と　渡りけり

青葉風　おさげの姫と　出逢い橋

南の堀に架る。「かんぽの宿」へ通ずる。

朝の散策に出逢い橋を渡った。異様な出で立ちの自転車のお爺さんと出逢った。きょろきょろと堀の方を眺め乍ら自転車を押している。

「なんばしょっとカンモ？」

「スッポンば獲りヨットタンも、最近は外来種の亀に押されてちっともオランゴツなったバンモ」

鼈（かめ）鳴かず　老漁夫嘆く　城の堀

そういえば、明治の新政府が出来た頃、外国の賓客をもてなす料理には必ず柳川のスッポンが使われたとか、何かの本で読んだことがある。水が澄んで水量も豊富だった柳川の掘割にはきっと沢山の美味しいスッポンが育ったのだろう。

注・鼈はスッポンの事

水照り染む　秋の夕陽や　なまこ壁

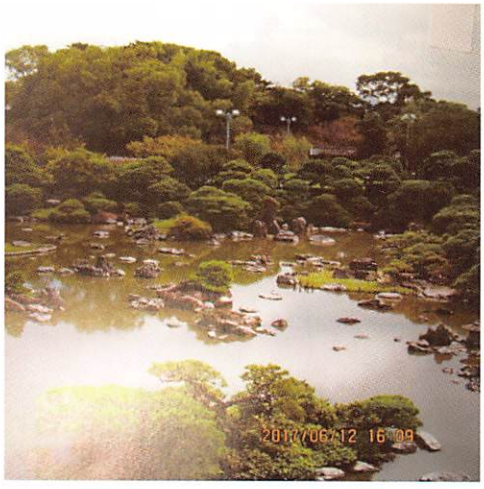
白秋の詩碑が目障りだが、西日が差すと水面の影がゆらゆらとなまこ壁に揺れ、懐かしい故郷の景色の一つだ。

しづかさは　殿のお倉の昼鼠
ちょろりとのぼり　またも消ぬかに　白秋

注・水照りは、白秋の歌詞から。昼鼠は水陽炎の方言。

古雛　幾代の姫御　見つめしや

名月や　ミニ松島の　松の影



昼の林泉石のあひさにゐる鴨の
一羽は黒しつれづれの鴨　白秋

かがよふ方へ鴨の寄り行く　白秋

注・白秋は松濤園の事を「旧藩侯の林泉」と詠った。

血と汗と　外国馳せし　金甲

文禄・慶長の役、出兵の折着用したもの。柳川藩の金甲軍団はその勇猛さを敵味方に轟かせ、敵はその姿を見ると退却し、味方は勇気百倍、歓声を挙げて迎えたとか。

俊秀の　育ちしコート風光る

立花文子自伝『なんとかなるわよ』より

「私が二十歳の時、チャンピオンになる三年前の昭和五年に父が全国でもまだ数面しかない、もちろん九州で唯一のアンツーカーのコートを造ってくれました。」

「トンさん屋敷のコートは雨で濡れてもテニスのでくるゲナ」

「四月の「立花伯爵邸テニスコート開き」には伝習館中学の庭球部や父のテニス仲間が招待されました」

注・立花文子さんは、立花家の一人娘としてお生れになり、戦後の混乱期の難局を夫・和雄氏と共に、御花を料亭・旅館としてスタートさせ、乗り越えられ、今日の繁栄の基礎を創られた女傑です。万紗子さん等、三男三女の母上です。

文子様がテニスを始められたのは十歳の頃、その後ひたむきにテニスに打ち込まれ、遂に前記の様に昭和八年の第十回明治神宮全日本女子テニス選手権大会で優勝、女子テニス界の頂点に立たれた。

昭和二十年代伝習館高校テニス部の全国制覇や、柳川高校が名選手を輩出した遠因はこのコートだと言っても過言ではない。

優勝カップと共に立花文子さんの雄姿。御歳二十三歳

五月四日、松濤館の集景亭で小野家の法事の後の宴会を開いた。本当は宿泊したかったのだが、さすがにゴールデンウイークの真っただ中、全室予約客で埋まっていた。チラッと万紗子様にお願いしようかとも頭を掠めたが、ご迷惑をかけてもと断念した。

昼間から一杯機嫌で外に出る。御花全体、まるで原宿の竹下通り並の大混雑で文字通り押すな押すなの感じ。聞きなれぬ外国語も飛び交い、きっと文子様も天国からこの盛況ぶりを大満足でご覧になっていることだろうと思った。

松濤館の玄関を出た左側のひと気の少ない壁側にひっそりと、しかし絢爛と石楠花の花が満開だった。文子様が見守っているかのように…。

石楠花や　なんとかなるわよの薫り

殿三人（みたり）　姫御も三人　薔薇の園

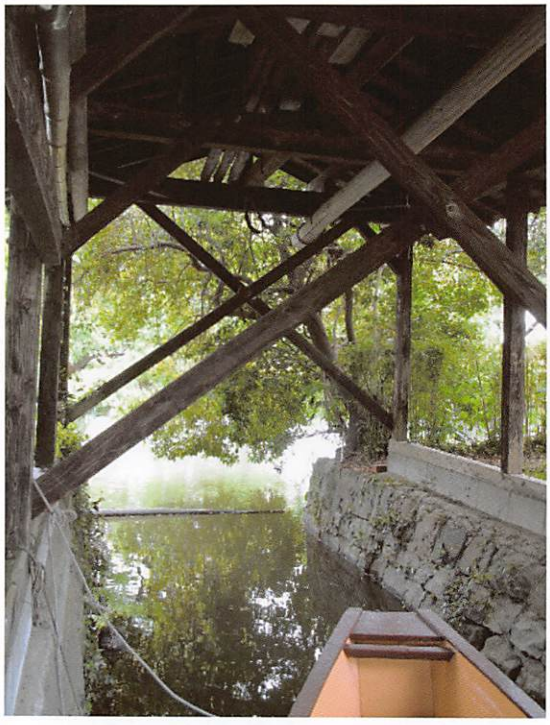
御船倉（おふなぐら）　石段々へ　春の水

御船倉（おふなぐら）　水照（みづり）ゆたかに舟うけて
　吹き通る風の夏は涼しき　白秋

御船倉（おふなぐら）　いとど明るき水の上（へ）は
　蛙の声も良く徹るなり　白秋

この文？　を出せば、いずれ副会長兼編集委員の万紗子様に見て貰うことになるが、前もって送信してチェックをお願いした。何せ斜庵にとっては懐かしい故郷の一部であるだけの御花だが、万紗子様にとっては、それ以上の、懐かしい日々を過ごされた実家の事だから、間違いがあってはいけないと思い…。

返信を頂いた～前記、文子様の著書『何とかなるわよ』に、俳句も何句か掲載してあり、それに御花には句碑もある。句集も出されているとのご教示を頂いた。早速、本棚から引っ張り出して再読して驚いた。表紙の裏に平成十六年八月読了、平成二十一年八月再読、というメモがある。その頃、斜庵は漢詩に夢中で、おそらく俳句の個所は飛ばし読みしたのだろう。申し訳ない。実はこの稿掲載の五七五はあくまで五七五であり、俳句ではない。



後日文子様の句集『藻の花』も送られてきた。又々驚き！まさに女流俳人だ。句集『藻の花』の序文はあの高浜虚子の孫の星野椿さん。そういえば斜庵が柳川の銀行勤めの頃「虚子が来る！虚子が来る！」と支店長が大騒ぎしていた。余談だが水門の上の虚子の句碑を造ったのは斜庵が支店長に紹介した糀屋町の松永石屋さんである。その時虚子は御花に宿泊。その後、御花には高浜年尾、高浜晴子、星野立子、稲畑汀子等々虚子一族が続々宿泊している。探せば各人が御花で詠まれた句があるだろうが、それは別の機会に譲り、ここでは俳人立花文子作品の中から、御花に関わる句を添えて同窓会報の紙価を高めようと思う。

先ず、御花の女将ならではまた女性ならではの、感服した一句から…

十薬や庭の案内もこゝらまで　文子

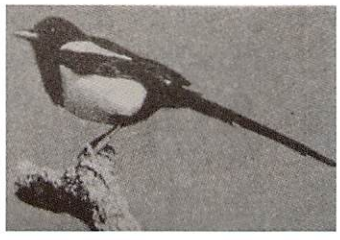
今日は女将自ら大切なお客様一行を案内して御花の庭を鑑賞して貰っている。ふと気付くと十薬の茂っている所へ来た。庭番の政吉さんの顔が浮かぶ「そこは手入れ、まだですよ」と。これ以上裏庭までお見せするのはやめとこう。お客さん・庭番・庭の状況への気配り、目配り、心配りの詰まった十七文字である。十薬＝どくだみ。本来薬草だが一寸放っておくと、どんどん増えるやっかいな雑草。

傾ぎつも文久雛と親しまれ　文子

さりとても雛のやんごとなき面輪　〃

雛壇の菱餅の紅反りかへり　〃

白萩を
ゆりこぼしけり
かちがらす　文子

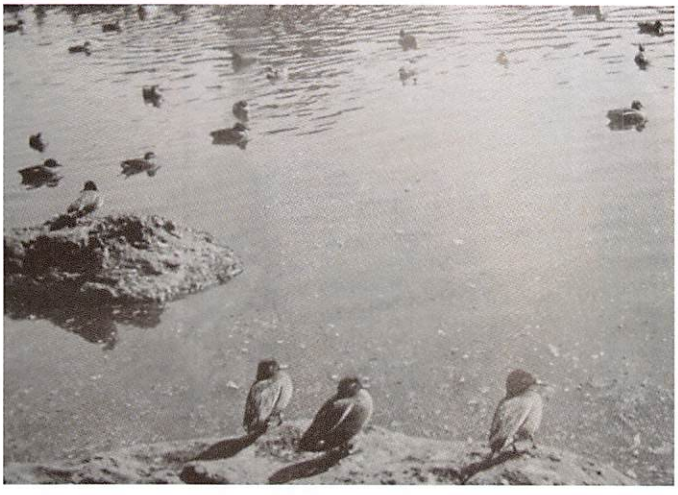


注・かちがらすはかささぎの事。柳川では高麗鳥。国の天然記念物。

鴨岩に上る足跡濡れてゐし　文子

水尾水輪入り交りたり鴨の池　〃

鴨笛といふより鈴の音に似たる　〃



炬燵舟内濠外濠合ふところ　文子

写真ー広報やながわより

ふるさとを恋ふる心や穴まどひ

白秋も死の一ヶ月前、『水の構図』のはしがきを、「ああ、柳河の雲よ水よ風よ、水くり清兵衛よ、南の魚族よ。」と結んで、故郷柳河への強い想いを詠っている。

中国の人も二五〇〇年の昔、「蓴鱸の思」とか「故園の情」とか、日本人が、まだ竪穴住居でうろちょろしていた頃、故郷を思う心情を詩文に遺している。

欧米人も古くから「ホームスィートホーム」を広く愛唱するという、同じ心がある。

人はどうして故郷を恋するのか？　誰か教えてくれないかな！

ふるさとは元気をくれる宝物

—平成二十九年九月

何回、同期会の集合写真をここで撮ったやら！

先輩・後輩より

自分史の一齣（こま）
―海外への旅―

高5　阿津坂林太郎

はじめに

海外への第一歩は一九七〇年夏の東南アジア・ソ連への旅であった。この旅のアラカルトをアバンチュールとチャレンジをコンセプトに途切れ掛った記憶の糸を手繰りつつ、私の体験を基にタイムスリップして綴りたい。

この年には大阪万国博覧会が開催されて、六千四百万もの入場者を得て、我が国民の大人気を博したが、特に岡本太郎の〝太陽の塔〟が人寄せの象徴的存在となっていった。

一方我国初のハイジャック〝日航機乗っ取り事件〟が勃発し、各地では大学紛争の嵐が吹き荒れた。そのために大学の先生方の中には、学生達の追及を逃れて、海外脱出を図る方も少なくなかったという。その受け皿の一つが第十三回国際歴史会議ではなかったか。この会議には我国の著名な歴史学者も含めて百数十名の参加者があった。私の所属する大学からも六名が参加した。折しも私の勤務する大学も一部の学生に不法占拠されていて、休業状態にあったので、学長に願い出て、約二十日間の職免（職務従事義務免除）を許可して頂いた。

まだ一ドルが**三百六十円の固定相場制**の時代で、参加費用はツアー代も含めて約七十万円にも及んだ。妻は私の海外旅行志向の意を汲んでか、義父の許へ赴き、借金をして旅行費用を調達してくれた。

国際歴史学会国内委員会はJTB海外旅行部に依頼して、この学会のツアーと企画を依頼して参加者を募った。煩瑣な海外旅行の手続きも代行してくれるというので私も申し込んだ次第であった。

私の参加したAグループは三十名編成で、真夏の八月九日午前中に羽田空港を出発して約二十間の海外への旅のスタートを切った。

この学会ツアーに誘ってくれたのは横浜市大で親交のあった遠山茂樹教授であった。この旅がわが人生に資したこと大であった。

東南アジアへ

この旅の途上、先ずフィリピンのマニラに立寄って、空港内のロビーに展示されていた〝**水牛が農耕に従事している写真**〟を見て、戦中、終戦直後の筑後地方の農村風景が俄かに甦ってきた。

マニラを飛び立った航空機は南シナ海をひと跨ぎしてヴェトナム上空に差し掛ると東南アジア第一の大河**メコン川**が望まれてきた。折しも**ヴェトナム戦争**の最中で、はるか上空の機内からは米軍戦闘機が真夏の陽光に照らされて、飛び交うのが散見された。急に背筋に寒気が走った。

タイのバンコク国際空港に近づくとスコールに見舞われた後で、バカデカイ七色の虹が顕れたのをまのあたりにして、八女地方の上妻上空から柳川方面目掛けて襲来してくる雷雨に連想が繋っていった。

当時**東パキスタンのダッカ**では、雲霞（うんか）がたかるように群って来た物乞いの子供達に取囲まれて、脱出するのに難儀した。

パキスタンの大都市カラチにて

マニラ、バンコク、ダッカの三つの空港のトランジットを経て、西パキスタンの南端カラチ空港に着陸したのは午后十一時過ぎで、ビーチルクセルホテルに投宿したのは夜中であった。

翌朝起床して廊下に出てみると、各客室雑用係りの男達がゴロゴロと転って直に床に寝ている光景に度胆を抜かれた。

私の旅の常として、ホテル近くに散策に出てみると、日雇い労務者の選抜中であったが雇用される者は極く僅かと見えて、多くの応募者は職にあり付けず淋しく立去って行く後姿に哀感を覚えた。

その日の午前中はモハメドアリ廟、市内のモスク等を観光して、午後はカラチ大学を訪れた。メモによれば、一九七〇年現在、学生数三千六百人、教授陣三百六十名、講座数は三十六課程ということで、司書である私から、図書館の蔵書数を尋ねると**百万冊**以上という回答で、この大学のスケールの大きさに驚いた。

三日目には、アラビア海岸に行って、ラクダの背中に乗せて貰ったり、海浜を訪れていた子供達と打ち興じた。次にカラチから約百キロ東方にあるタッタ遺跡を訪れた。

この折、後に熊本大学の学長となる**工藤敬一**氏（日本中世史）と当地の子供達と無名戦士の墓前で撮った写真が手許に残っている。その後インド国境近くの**インダス川畔**に行ってみると、地元の漁師が原始的な漁をしているのを見るにつけ、中学、高校時代、柳川の**城堀の水落し**の際の待網の有様に連想が及んでいった。

このところパキスタン国内では、テロ事件が続発していることを想えば、治安の良かった時代にこの国を旅できたことを強運と感じている。

この夜アフガニスタン上空を飛び越えて、当時のソ連邦内のウズベキスタンのタシケントに向けて飛び立とうと、空港内で待機し乍ら痺れを切らしていると、絶対の権限を持つパイロットが泥酔してしまい、出発が大幅に遅れて、到着も翌朝の未明となって、我々一行は何やかやのストレスで、すっかり疲労困憊した。

ソビエト国内の交通機関の遅延については**埴谷雄高**のこの頃のソ連旅行記〝姿なき司祭〟を読んで少しは知っていたが、この事態に直面してこれから先が思い遣られた。

其（それ）見たことか、タシケント空港での入

関手続きも難渋であった。私の直前に並んでおられた平成八年文化勲章者で日本中世史の権威**竹内理三**先生の手続きの番がくると、事前に目をつけていたのか、入関の係官が何やかやと難癖をつけて来て、前に行列ができてつまってしまった。明らかに袖の下を求めて来ているのが分った。この事態を見るに見かねて、ここが私の出番だと心得えてしゃしゃり出て先生を通してあげた。先生に感謝されたことは云うまでもない。爾来先生に信頼されたのか、「アラル海から流出する水に触ってみたい」とか、「モスクワ川クルーズをしたい」とか、レーニングラードでは国立民族博物館に連れて行ってくれないかと頼み込んでこられた。帰国後間もなくして〝一九七〇年ソ聯旅行ノ記念トシテ〟と直筆のサイン入りで、先生の編纂になる**『角川日本史辞典』**が恵贈されてきた。

シルクロード沿いの都市ブハラ、タシケント

タシケントはモスクワから東南へ三千三百キロ離れた当時のウズベキスタン共和国の首都で、シルクロード沿いの都市**ブハラ、サマルカンド**への玄関口ということであった。私の知る限りでは、人類初の人工衛星ヴォストークに乗込んで、宇宙空間を飛んだ**ガガーリン**の生地ぐらいであったが、果して、この国の政府政庁の前に行ってみると彼の大きな彫像が鎮座ましましていた。

タシケント空港で、三十人乗り位の小型のプロペラ機に乗り換えて、ブハラに向った。二千メートル上空からブハラまでの俯瞰の光景が如実に展望された。ブハラ初日に我家に出した絵はがきには〝とうとう憧れのシルクロードの街ブハラに来ました。砂漠の真只中に居ながら、樹木の緑りと陽光に輝く古城そして果しなく広がるハイロットファームがすばらしい。歴史に名高いアレキサンダー大王、ジンギスカン、チムールに亡ぼされた所です。

ところが東大の秀村欣二先生（西洋史）がコレラの疑いを掛けられて、一日差し止めになりました。突然大柄の当地の看護婦がやって来て検便を強要されました。僕は好奇心に任せて元気にあちこち歩き回っています。時間があるのに、行く所がなくなったので、近くの中学校へ卓球かテニスのお手合せに行こうかと思案中です。日本から持参した梅干しとコインが威力を発揮しています。言葉の不自由さはとんと感じません。樺太育ちの君に教ったスパスィーバー、ハラショー、スコーリカ等の単語を多用して、身体言語と度胸でやり過しています。日本のビールとお茶が無性に恋しいです〟とあった。

ブハラでは古い時代の寺院の遺跡等に案内されたが印象深く残っているのは、ブハラ広場に聳えるように立つ〝**カリヤンの尖塔**〟と**バザール**位か。夜バザール辺りを歩いていると、日本人に興味を持ったのか、民家に招じ入れられてこの地の家庭料理の饗応を受けて嬉しさこの上もなかった。そこで彦根藩主末裔のお茶の水女子大の**中村英勝**（英国史）氏から掠めたジョニ黒を持込んでこの家の主人とオダを上げていると、すっかり泥酔して了い、この家の誰かにホテルまで軽トラックで送り届けて貰う仕儀になってしまった。次の日にはここが〝ブハラ絨緞〟で有名な所なので、日常生活に一般家庭でどう活かされているかを見学させて貰った。又この地方には羊毛の織物工場が多く存在して、街中を歩いていると若い縫い子が目についた。その中から好みの娘に目をつけて、ホテルに遊びにこないかと誘ってみたが、二人以上なら伺っていいけど、一人だけでは駄目だと断られた。この国には**相互監視制度**が布かれていることが窺い知れた。私の下手な英語が通じたのはこの地方の英語教育の普及の所為と思われた。

タシケントの初めての夜は宿を取ったホテルの向い側にある**ナヴォイ・オペラ・バレー**劇場にオペラを観劇に出赴いたが、現地語で演じられていたので、さっぱり分らず退屈して、一人で郊外へ散策に出掛けた。すると野外で映画が上映されていて、多くの市民が群っていた。我国の終戦直後のアメリカ映画の上映風景が想い出されてなつかしかった。

映画を見終って、上映地近くの居酒屋に立寄るとブランデーが美味いと勧めらて飲んでいるといつの間にか酔ったらしく、近くのうす暗い公園内をふらつき乍ら駅の方に歩いていたら、二、三人連れの暴漢に襲われて、あっという間に**高級腕時計**を強奪された。この国の治安の良さの喧伝を信じていたので気の弛みもあり、外国でのひとり歩きの恐さに体が震えた。

悲嘆に暮れる間もなく、走って来た路面電車に飛び乗り、行き成り片言の英語で助けを求めた。この時地獄に仏といおうか、偶々乗り合せていた朝鮮人の若者が買って出てきて親切にもホテルまでエスコートしてくれた。ホテルまで戻る途中の会話の内容から察するに、**スターリンの移住命令**でサハリンから強制的に移住させられていたことを知った。日本の兵隊も又この地に移り住んでいた事実は新聞記事（舞鶴引揚げ者博物館の展示資料）で、後で知った。

タシケントでは当地の学者との情報交換会も催された。この席上、日本人学者が進んで手を揚げないので、又買って出て、岩手県民謡〝**南部牛追い唄**〟を謡った。すると外国の学者からは万雷の拍手があり、日本人として面白を施したと胸をなでおろしたが、我国の学者からはひどい顰蹙を買って違和感に噴まれた。

これと似たり寄ったりのことは国際歴史学会の席上でも日本人の学者の発言は極めて稀で、我国学界のステイタスは海外で通用しない場面もかなり見掛けた。

私はと云うと、外国人に受けた拍手に自信を得て、カラオケでは全国各地の民謡を唄い続けている。

夏休みを終えて、タシケントからモスクワへ向う機内はコルホーズのバザールで土産物の果物などを手にした帰省客で混雑していた。

九州程の広さをほこる世界四番目の**アラル海**を左眼下に眺め乍らのフライトの眺望は美観に恵まれた。

偶々隣り合せに座った**ウズベク人**のおじさんと辞書を片手に話していると、いつの間にか打ち解けあって来た。するといきなり新聞紙に無造作に包んだ蝶鮫の薫製のプレゼントを受ける好運に恵まれた。この**蝶鮫の薫製**はホテルのシェフに頼んで解(ほぐ)して貰い、このグループの夜の食卓に上った。

モスクワの十日間

八月十六日から十日間投宿したのは、モスクワでは超一流のウクライナ・ホテル（現ラディソン・ロイヤル・ホテル・モスクワ）で部屋は十九階、市内の様子が手に取るように眺められた。この日から来る日も来る日もレーニン丘に聳えるモスクワ大学の第十三回国際歴史学会場へ専用バスで通った。

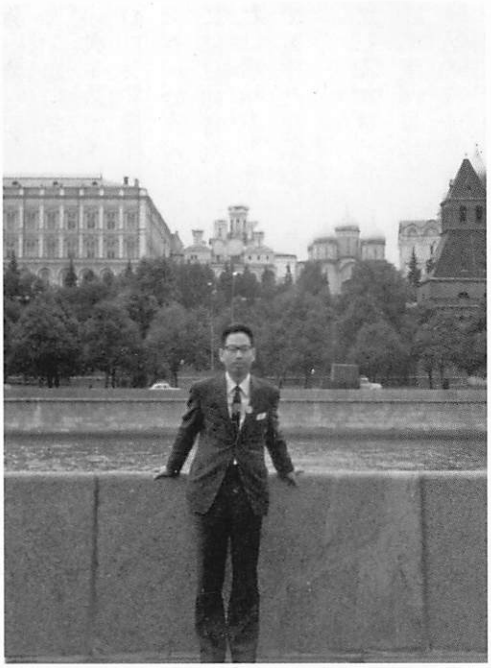
十六日夜にはモスクワのシンボルのクレムリン大会宮殿四階でレセプションが催されて当時のコスイギン首相の出席の下、ソ連が世界にほこるボリショイバレー団の総出演があって、私は齧り付きで、心ゆくまで楽しんだ。

この時のスナップ写真を現場で求めたものがわが家にあるが外国人ばかりに囲まれている。

このホテルには十日間程も逗留していたので、二階のレストランに食事に行くと、日本人であることを知ってのことか、決って〝有楽町で逢いましょう〟をこのホールの専属楽団が演奏してくれた。

ある宵、このレストランの宴会場へ近づいてみると、イランの石油成金と思しき御大尽が若き美女を侍べらせて、宴の最中であった。アバンチュールを楽しみたい私は、その中にそっと潜り込んで無銭飲食に及んだが、金持喧嘩せずというのか、何んのお咎めもなかったので胸をなでおろした次第であった。

夜のモスクワ繁華街はネオン・サインも乏しくひとり歩きには恐怖感が伴った。



モスクワ川を隔てたクレムリンを背にして
（一九七〇年八月）

ある夜遅くホテルに辿り着くと、ロシヤ青年に呼び止められた。よく話しを聞いてみると、ここのベリヨースカ（ドル・ショップ）で、他の誰れもが所有していない品物をプレゼントしてくれたら、このボルガという高級車で、何日間も貴男の好きなモスクワ近郊の観光地へ案内しますが如何ですかという相談であった。彼はクレムリンの高級官僚の息子というのだ。平等で公正な社会状況では誰も持っていない物・で自分の存在感を誇示したいのも分らないではなかったが……。

夜遅く、モスクワ市内にあるロシア正教会の近くの暗がりを歩いていると、若いロシヤ女性がしきりに誘ってきた。一見して街娼であることが分った瞬間であった。

横浜市大の服部一馬先生の実弟で、当時三菱商事のモスクワ支店長の粋な計らいで、日本人好みのレストランに予約がしてあった。それはリネグリンナヤ通りにあったウズベク料理のレストラン〝ウズベキスタン〟であった。訪れたのは今井清一、服部一馬、山極晃の三教授と私の四人であった。日本の常識では予約してあるので開店直前にこのレストランに到着して、入ろうとして、ドアをドンドン叩いても開けてはくれず不評を買うばかりであった。予約客が出揃うとドアの内側からカギをかけて、当日客は受け付けないというのだ。私には合点が行かなかったが……。宴もたけなわを過ぎた頃、奥の方で、おだをあげている連中から招きがかかって近づいて行くと、何んでもウズベキスタンからモスクワに留学している学生達の同窓会の最中であったが一緒に飲もうということだった。本場のウォッカを美味しく飲むには赤ワインに氷水を混ぜて飲みなさいと教えて貰ったが、がたいに劣る私はたちまちにして酔いすぎて後は酔の世界をさ迷う結果となった。

只、二度あることは三度あるというが私の人懐こさがウズベク人に何んだか気に入られたと見えて、ブハラでは家庭料理の饗応を受けたり、モスクワへ向う機内では蝶鮫の薫製を貰ったり、更に同窓会に招き入れられて、ウォッカの飲み方を教えられたりと不思議な**えにし**を感じたものだ。

レーニン図書館を訪ねる

司書で生業(なりわい)を立てている私は福沢諭吉の『文明論之概略』にも記されている世界最大の**レーニン図書館**にはどうしても訪ねてみたかった。そこで、ある午後学会への出席をさぼって、ロシヤ人通訳を頼んで、**脇田晴子**夫妻と三人で、レーニン図書館へと入館した。私は日本から持参していた松尾芭蕉の〝奥の細道〟を受付に提示して、寄贈者名簿に記入署名して寄贈を果した。するとベテランの女性司書が付いてくれて、広大な館内の案内は云うに及ばず、この図書館所蔵の国宝ともいうべき**インキュナブラ**（揺籃本）を心ゆくまで堪能させて貰った。

脇田晴子先生は我国女性史研究の第一人者で平成二十二年に文化勲章を受章されたが、一昨年惜まれ乍ら、亡くなられた。帰国後著作の交換をしたり、手紙のやりとりは永年続いた。

頂戴した封書の文字面の男性的な書きっぷりにはいつも感心させられたものだった。

八月十六日から一週間の国際歴史学会が閉幕すると、二十三日の夜にはこの学

会の全参加者がソ連側招待の大レセプションが催された。場所はアルバート通りの大レストランで食べ放題のバイキングのロシア料理がふんだんに振舞われた。肉料理好みの西欧人はロシヤ産の魚貝類には見向きもしないので、日本人である私は珍味のキャビア等が存分に味えてとても幸せな気分になった。

ヤースナヤ・ポリャーナ

二十四日にはモスクワから百九十キロ南方のヤースナヤ・ポリャーナへのバスツアーに日本人としては只一人参加した。途中広大なひまわり畑に出逢ってソフィア・ローレン主演の〝ひまわり〟の場面を連想した。トイレタイムには、インフラの整わぬ地域では林の中で用を足す始末であった。隣席の米国の学者に何を研究しているかと問われたので、ローカル・ヒストリーと答えると自分も同じだといって、背骨が折れる程、親愛の情をこめて抱き締められた。

ヤースナヤ・ポリャーナの屋敷博物館内トルストイの墓

ヤースナヤ・ポリャーナで印象に残っているのはトルストイ屋敷博物館と彼の墓である。フランス人のガイトによれば、この地で、彼は生涯の大半を過し、大作〝戦争と平和〟や〝アンナ・カレーニナ〟を著したとのことであった。最晩年には家出をして、近くのアスターボオ駅で亡くなったが彼の家出については小林秀雄と正宗白鳥との間で論争が行われたと記憶する。トルストイの墓はわずかばかりの盛り土に青草が生えている質素なものだったのに較べてノヴォデヴィチ墓地内のチェホフの墓は彼の頂上期のパフォマンスで彩られていた。

屋敷博物館には戦前何人もの日本の文学者が訪れているが、司書である私が図書室に入ってみると、直ぐに徳永直の〝太陽のない街〟が天と地を逆さに配架されているのを目敏く見つけて、担当者に直して貰った。又エピソードとして、一八五三年のクリミヤ戦争に際して、トルストイがモスクワの軍隊に呼ばれて、夜を徹してペダルを踏み続け馳せ参じたという話しを聞いたのを妙に覚えている。

シベリア鉄道でサンクトペテルブルグへ

フィナーレは永年の憧れの路線シベリア鉄道を利用した夜行列車の旅であった。一人占めのコンパートメントの寝台車はとても快適であった。戦前シベリア鉄道を利用してヨーロッパへ向った多くの芸術家や島崎藤村、与謝野晶子、横光利一、林芙美子等の名にもあやかりたく何んとしても乗車したかった。かつてのペテルブルグも、当時のレーニングラードは市内をネバ川が縦横に走るヴェネツィアに匹敵する水の都で、川岸は遊歩道が整い、釣り人も見られた。

私も五円、十円金といった小銭（コイン）をエサに子供に釣竿を貸して貰い、釣糸をたれてみると雑魚が面白いように釣れた。

レーニングラード市内は名所旧跡、観光名所も多く二泊三日では残念乍らとても訪ね切れなかった。**エルミタージュ美術館**、**ロシア民族学博物館**、巡洋艦**オーロラ**号、**ペトロパヴロフスク要塞**位しか見物できなかった。エルミタージュ美術館には一日を要して、イタリア美術のラファエロやダ・ヴィンチの絵を、オランダ美術ではレンブラントの絵が印象深かった。只館内に展示されていたロシア地図には、北方領土がロシア領となっていたのには納得がいかなかった。又ペトロパヴロフスク要塞内を舟でくぐった時の気持も複雑であった。ここにはシベリア送り寸前のロシアの大文豪**ドストエフスキー**が幽閉されて生死の境いをさまよっていた場所だ。彼がもし死刑になっていたら、数々の名作も世に出なかったと想像すると感慨無量であった。**ペテルゴフ**の上の庭園の噴水と下の公園の大滝も見事だと感心したが、フィンランド湾に向った地点が私が地球上で立った最北端だと意識した時は心に痺れが走った。何んとも残念だったことは〝北槎聞略（ほくさぶんりゃく）〟を基にした井上靖原作の『おろしや国酔夢譚』の映画の舞台ともなった**大黒屋光太夫**がエカテリーナ二世に拝謁したエカテリーナ宮殿に行けなかったことだ。

帰り支度

かくして再びモスクワに戻った私は帰心矢の如く、帰国の準備に余念がなかった。帰国前日、一九二一年レーニンの命により設立された世界最大の「**グム百貨店**」へ土産物をまとめて買いに行った。子供には木彫の熊、マトリョーシカ、妻にはシルバー・フォクスの襟巻、自分のものとしては控え目に琥珀のカフス・ボタン、酒類としてはウォッカ、アルメニヤ産のブランデー、それにフランスのコニャック〝カミュ〟の税関をギリギリ通れる三本を買って帰った。襟巻を買いおえた後、他の品に目移りがして、取替えを頼ってみたが断られてしまった。担当した店員がロシア式算盤の使い方が下手で、計算が不得手に由来したことが後で分ったが、この国ではいろんな場面で面喰らうことも多かった。

八月二十六日、モスクワのシェレメチェヴォ国際空港を離陸して、十時間余の飛行後羽田空港に着いた時、安堵と共に二十間の旅の疲れがどっと出た。

この旅について想うことは若い時ほど好奇心に充ち、冒険心に行動力もあるのでより豊かな旅情が味わえるのではなかろうか。五十年前の旅のあれこれを再構成して綴ってきたが、意外と楽しく旅行記を物するのも捨てたものでないと思った次第であった。

久しぶりに帰郷し 3つの感動を

高5　下河秀行

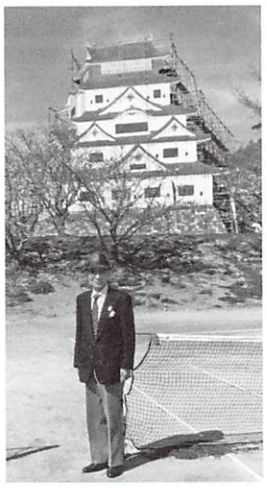
春爛漫の昨年四月三日～五日、二年ぶりに帰郷し、柳川市役所・母校伝習館高校・高畑公園などを訪問し、いろいろなことで感動した。

観光大使として金子市長を訪問

最初は柳川市役所を訪問し、観光都市柳川が〝おもてなし〟を市政の中心に位置づけて取り組みされている金子健次柳川市長と面談し、私が四年前柳川観光大使をお引き受けした時に「**30の提案**」の**進捗状況**をお尋ねしたら、この四年間で具体的に推進されていることで、まず感動した。

例えば、明治五年に焼失した柳川城の再建については、前年に続き柳川城址へそくり山に伝習館生徒によるパネル百五枚を継ぎ合わせて見事に〝柳川城〟が制作され展示されていた。

本物の旧城がいつ再現されるかは予測出来ないが、このパネルのような本物の素晴らしい柳川城が再現されれば観光客が急増することは間違いないだろう。地元市民と共に、郷土を愛するものがお互いに〝創意・工夫・アイディア・知恵〟を出し合って、大きな成果に繋げたいものである。



また最近、劇場映画が史上最高の動員をしており、見直しされているので、柳川をロケ地にした映画や大河ドラマの誘致を提案していたがNHK大河ドラマとして、**立花宗茂公と誾千代に光を当て**、県や近隣市町村を巻き込んで誘致されていることを知り感動した。そのほか、観光フェアや物産展など、観光プロモーションを首都東京で積極的に開催したり、〝観光大使の集い〟を開くなどの提案に対し、近年確実に実行されている。私は日頃から柳川の広報活動は、一流であると思っている。その他提言したことがいろいろ積極的に取り組まれており、深く感謝している。

次に同級生による〝真の友情〟に感動…

四月四日は、朝から同級生N君が、〝グッドデザイン賞〟に輝く西鉄柳川駅まで迎えに来てくれて、久しぶりの高畑公園（三柱神社）や前述のへそくり山などを散策し、若き日々に思いを馳せていた。同公園の桜は、ほぼ満開で素晴らしかった。

西日本スケッチ大会で入賞したことや、秋の〝おにぎえ〟でサーカスなどを楽しんだ子どもの頃を懐かしく思い出していた。夜は伝習館同期生十八名に若力旅館に集まっていただき、その友情に感動し、深く感謝したい。**同期生と若き日の思い出や近況**など、懇談は深夜まで限りなく続き、感謝の一語に尽きる。

母校伝習館で北島校長先生に感動！

伝習館北島校長先生と私

翌四月五日は母校伝習館を訪れたが、昔の面影はなく校舎は様変わりしていた。校長先生とアポイントをとって、四月一日赴任されたばかりの北島啓志校長先生に、初めてお目にかかった。先生は私の突然の訪問に赴任早々で、しかも新学年入りでお忙しいにも拘わらず校長室で快く応対していただいた。長身のスマートな方だった。校長先生は、福岡県教育庁教育企画部教職員課より本校校長に着任されたとのことだった。今後、創設の〝三稜精神〟に基づき、指導していただけるものと思う。

三稜精神は、知・徳・体の調和のとれた人材の育成にあり、伝習館教育の根幹をなすもので母校は文政7年（西暦一八二四年）に、柳河藩第九代藩主　立花鑑賢（たちばなあきかた）公が藩学として創立されて以来、今年で**創立一九五年を迎え、長い歴史と伝統を誇る学校**で文武両道の進学校であり、今後益々発展することが期待される。

最後に、二人の教頭、与賀田敦先生と井上淳郎先生を紹介していただき、いろいろと懇談し、感謝すると共に教育者として、その〝優しさ〟に感動した。校長先生は、将来、リタイア後は〝晴耕雨読〟の生活をしたいとおっしゃっていたのが印象的であった。（柳川観光大使）

同期生と楽しい懇親会

古賀繁一元東京同窓会会長にお会いしたこと

高10　内山秀生

一昨年十二月四日NHKで「戦艦武蔵の最期」が放映された。「武蔵」といえば以前、新潮文庫「戦艦武蔵」（吉村昭著）を読んだことを思い出した。この中にある三菱重工長崎造船所で同艦の建造の設計副主任が古賀繁一氏だったのだ。

テレビを観た後古賀繁一氏にお会いしたことを思い出した。私の父と親友のK君の父と繁一氏の三人は伝習館中学二十八回卒の同級で二八会の世話役でもあった。

内山、古賀繁一氏、K君（平成二年）

私は早速日記帳を調べた。確かに平成二年三月八日にお会いしていた。

又アルバムもめくってみた。「あった!!」。三人で写っている写真が…。

私が丸の内の支店に勤めている時だった。

ある日突然K君から電話があり「内山君、繁一つぁんに会いに行こい」と言う。「あの三菱重工の繁一つぁんやろ？　えーっ!!」とびっくりし躊躇していると「早う会わんぎっと会えんごつなるばい!!」と言う。

K君は「内山君何とか会えるごつしてくれんね」と、いともたやすく言う。

いろいろ考えたがもう当って砕けろの気持で電話することにした。

繁一氏は当時は相談役をされていた。

思い切って三菱重工へ電話することにした。

役員秘書室に先ず電話した。

「もしもし、私、内山と申します。父が古賀相談役と伝習館中学の同級で、親友のK君とお訪ねしたいのですが…」

「どういうご用件でしょうか？」（これには参った）

「私とK君の父が相談役と親しくさせていただいていたので故郷柳川のお話が出来たらと思いまして…」

「少々お待ち下さい」

一分位経っただろうか？

「お会いすると申しております」とのこと。

（内心ヤッターと思った。）

日時を決め訪問することになった。

当日K君と待合わせ三菱重工ビル九Fの役員室へ行く。エレベーターを降りると秘書が待っていた。（美人だー!!）

赤い絨緞を歩いて相談役の応接室に案内される。絨緞はフワフワで靴の音はしない。天下の三菱の役員室ともなれば違うな…とつくづく思った。

応接室に入ると相談役が出迎えて下さった。K君と自己紹介しご挨拶する。

「あんた達のお父つぁんにはよう世話になったよ」と気さくに話かけてこられた。

K君は柳河町出身で柳川の思い出話に入る。

「あんころは水が澄んどって各家には汲水場のあったもんの…」（相談役も柳川弁である）

「川岸には赤かはもじ（腰巻）のよう（よく）干してあったもんの」

沖の端の水天宮、おにぎえなど話は進んだ。

相談役から見れば「同級生の息子が柳川の話ばしに来た」。それだけでよかったのかもしれない。応接室は広く、ゆったりしていた。

「武蔵」のレプリカがしっかり飾られていた。

「内山君悪かばってん、二時に竹下君が来るけん…」ということで失礼した。竹下君とは代議士の竹下登氏では？と思った。

唐突に電話し面会をお願いし、気軽にOKしていただき、一時間余り柳川話に興じ、つき合っていただいた。

大先輩の人間の大きさを感じた。

このような機会があったのも故郷柳川、そして伝習館のおかげと思っています。

こういう大先輩がおられ気さくにお会いしていただいたことをご報告したくペンを執りました。

（追記）古賀元会長の東京同窓会へのご尽力については会報第6号～第9号に詳しく記されていますのでご参照下さい。

奈良に鳥の楽園！上村淳之画伯を訪ねる

高14　高木節子

上村松園、松篁、淳之の三代の作品が揃う松伯美術館

私が日本橋三越に勤めていた縁から、20数年前、三越で開かれた「上村松篁・淳之（しょうこう・あつし）パリ展帰国記念展」で上村淳之画伯の知己を得て、以来、奈良の松伯美術館にて春に催される「観桜の夕べ」（当年はお茶会）に毎年のように参加しています。

淳之画伯は美人画の大家、上村松園を祖母に、格調高い日本画を追求した松篁を父に持つ上村家の三代目。現代花鳥画の第一人者として活躍され、松伯美術館の館長も務めておられます。松伯美術館は奈良学園前の閑静な住宅地にあり、春は庭園内の見事な枝垂れ桜に、桃や藤を眺めるのも楽しみのひとつです。館内には上村家三代の作品はもとより、草稿、

写生など美術資料を展示、代々の画業も紹介されています。私の母は松園の影響を受け美人画を勉強しており、私も松園の絵をよく見ていたので親しみを感じていました。同窓会の皆様にも奈良旅行の際はぜひ訪れていただきたい美術館です。

平城京に近い平城の淳之画伯の自宅アトリエも訪ねました。平城の家は上村松園、その家族が京都から疎開したところ。父の松篁が昭和15年ごろ、この土地に居を構え、写生用にクジャクやウサギ、キツネを飼育していました。唳禽荘（れいきんそう）の始まりです。唳禽荘は鳥獣園さながら。松篁、淳之画伯は絵のモデルとなる鳥を各地から取り寄せ、育てました。淳之画伯を花鳥画家の道に進ませたのも幼い時から鳥に接し、慈しんできたことが大きいといいます。

禽舎や池には、タンチョウヅル、オオヅル、クマタカ、オオタカ、シロタカ、フクロウ、ニホンキジ、クジャク、ハヤブサ、アオガン、オシドリ、キンケイのほか、コゲラ、ルリビタキ、ウグイスなどの小鳥まで260種、1600羽を超える鳥たちが飼育されています。今や(財)鳥類保護連盟の研究所にも指定されるほどの規模です。

なかでもシロタカは松篁が晩年、狩野派の絵によく登場する白いタカを自分も描きたいと所望したもので、淳之氏は父のためにと各地から情報を集め、鳥獣商など様々なルートから手配を試みました。15年を経て、ついにロシアから取り寄せることに成功しましたが、松篁は94歳の高齢のため、取り組むのが困難に。後は息子に託すかのようで、シロタカが描かれることはなかったといいます。

鳥の生態をつぶさに観察し、一瞬見せる表情をスケッチし写し取る二人の創作姿勢には心打たれるものがあります。これは単に「対象の再現ではなく自然との対話の中で夢想した、真・善・美の世界を自然の姿を借りて具現化するもの」（淳之氏）。独特の花鳥画の世界は画伯が愛誦する「花をめで　鳥と遊ぶ」の心境から生み出されてくるのでしょう。

シロタカ（名前はセツ）

淳之画伯からは松園、松篁の思い出を伺うこともあります。松園は絵には厳しいが孫たちにはやさしいお婆ちゃんだったこと、両親が息子に苦労はさせたくないとの思いから画家になるのを反対されたこと、絵の道に進んでからは父とよきライバルで花鳥画においては一番の理解者であったことなどです。

淳之氏は84歳の今、若手の花鳥画家育成を目的に松伯美術館で公募による花鳥画展を毎年開催しています。鳥の生態を観察するために設けられた唳禽荘からはシロタカはじめ数々の珍鳥の繁殖にも成功し、各地の動物園に譲られました。さらには自然破壊を危惧され、京都のゴルフ場造成地を買い取り、整備するなど自然界の保護にも尽力されています。最後に松園、松篁が受章した文化勲章を、淳之氏もいつの日か受章されんことをご祈念しています。

青春を謳歌した楽しき10代

高20　髙巣和登

（昭和25年8月27日生。瀬高町出身）

皆が学業に追われる中、青春時代をやりたい放題に過ごした私、髙巣和登のプチ自慢も交えたお話にしばし、お付き合いのほどをお願いします。こんな〝**ニヤガリモン**〟も伝習館生だったんだとお笑いいただければ望外の喜びです。伝習館は学業第一、文武両道ならなお良しと言われる中、〝多芸多才〟の私はその殻に押し込められることなく日々を過ごしました。

この萌芽は小学生からありました。低学年から徒競走は負け知らずで、青春歌謡は舟木一夫、三田明、久保浩を上手に歌真似する早熟坊や。石原裕次郎の「嵐を呼ぶ男」を瀬高の映画館に女友達と見に行き、「♪おいらはドラマー、やくざなドラマー」とドラムをかっこよくたたく裕ちゃんにしびれ、ドラマーに憧れました。自己流ながら両手、両足を使い、いろんなものをたたいては一端のドラマー気取りになったもんです。

陸上部、ブラバン、さらにエレキバンドと八面六臂の中・高校生活

瀬高中学に入学し、ブラスバンドで小太鼓、トランペットを演奏しました。2年時にはビートルズに惹かれ、部員とビートルズ風バンドを結成。ジョン・レノ

ンのリードボーカルはもちろん私の担当ながら、このころは長髪が許されず坊主頭で格好つかず。中学では陸上部にも所属し、黒い弾丸ボブ・ヘイズ（東京五輪100m、10秒0で金メダル）に刺激を受け、100mの選手に。3年時、200×4リレーではアンカーとして山門・三池郡大会で優勝。また平和台競技場で行われた全国放送陸上大会に出場し、テレビデビューを果たしました。この時、応援に訪れた長兄がコーラを差し入れ。シュワッと泡立つ黒い飲み物を口にした途端、薬草っぽい大人の味に閉口したのを覚えています。その後、がんがん飲めるようになったのが不思議なくらい。

伝習館高校入学後も陸上、ブラスバンド、エレキバンドは継続。皆それなりにレベルアップしてゆきました。まず、陸上部では1968年の県大会で100×4リレーのアンカーとして激走し、3位（1～3位まで大会新。44秒7は現在、伝習館歴代12位の記録）。インターハイ出場を懸けた北部九州大会では自らの足の故障発生で敗れ、涙をのみました。

ブラスバンドも怠りなく励みました。小中高の先輩が所属した慶応大ニューサウンズオーケストラに憧れ、20人からなるビッグバンドを組んで、文化祭でドラムを実演。グレン・ミラーの「茶色の小瓶」「闘牛士のマンボ」ほか数曲を演奏、迫力あるサウンドで喝采を浴びました。一方で、伝習館生3人、山門生1人による新バンド、ザ・ベガーズを結成。第3回全日本ライトミュージックの大牟田地区ブロックでは3位入賞。自信を得て、続く福岡県決勝に「イエローリバー」（CCR）、「愛の讃歌」で出演するも入賞に今一歩届きませんでした。

バンドの関係で長髪陸上部員だった私は先輩に怒られっぱなしでしたが、伝習館の三稜マークのハチマキを長髪に締めて走るのは何とも快感でした。格好つけ屋の本領発揮です。伝習館に、本分の学業以外でこんなに多忙な高校生活を送った生徒はそういないでしょう。当然、陸上部の顧問、石橋国男先生（同じ瀬高町出身で、仲人もしてもらいました）からは「ちぃったぁ勉強せんぎっと、卒業されんぞう」ときつーいお言葉をいただいた。3年時には担任でブラバン顧問の三小田正満先生からも同じ言葉で叱咤激励され、何とか卒業できた次第です。

ニューサウンズオーケストラではドラムを担当

二兎も三兎も追いかけていると一兎も得られないというが自分にはそんな後悔はない。ともすれば灰色の青春時代を目いっぱいに謳歌できたのですから。

東京に出てからも、何事も懸命にと持ち前のバイタリティーで多少なりとも社会に貢献してきました。陸上部、ブラスバンド、エレキバンドでいい仲間に巡り合えたことが自分の支えになった。今は恩師の方々、諸先輩、当時の仲間たちにただただ感謝するのみです。

「イエローリバー」をカッコよく決める（左のボーカル）

学ぶことを目指して
～イーブンパーの人生もいいものだ

高21　千代島道生

はじめに

投稿にあたり、テーマを何にするか迷ったが、小生の人生を振り返るのも面白いのではないかと思い、『学ぶことを目指して』というテーマとした。したがって、とりとめのない内容であるが、ラン

ダムに書くこととしたい。

小生は、現在、都内のA大学の教壇に立ちながら、都内の公益財団法人にアドバイザーとして、週3回勤務している。現在66歳である。

3年前に、都内のA大学の大学院法学研究科博士後期課程を所定単位取得満期退学し、現在、都内のA大学において、法学部3・4年生に、大変難解であるといわれている（小生も同感であるが）『金融商品取引法』を教えている。これが、現在、小生の主たる仕事である（毎日が講義用レジュメ作りの日々である）。

大学院では、修士課程：2年、博士後期課程：5年と、大学院入学（57歳入学）以来、通算7年間在籍していた。博士後期課程では、3年間で所定の単位を取得したが、その後の2年間は、大学のご配慮で博士後期課程に在籍させていただいた。この2年間は、学位（法学博士号）を取るべき、学位論文の執筆に携わるためであったが、現在、270枚のまま保留の状態にある。実は、3年前の8月に、都内の公益財団法人から、アドバイザーへの就任のお誘いがあり、快諾したものの、学位論文の執筆が、見事に止まった。

では、これから、気恥ずかしいと思いつつ、小生の「学ぶことを目指して」に係る人生について、振り返ることとしたい。

1．学生時代

(1) 小・中・高時代

小生の人生で、悔いが残る時期は、中学1年～大学を卒業するまでの約10年間である。とりわけ、中学・高校の6年間はひどいものであった。勉強とは程遠い学生生活で、宿題はもとより、普段の勉強、受験勉強はまったくといっていいほど、やらなかった。正直、勉強しても、先に何があるのかが分からず（正直、将来の夢を描くことができない状況にあった）、完璧に学業を放棄している状態であった。この時期、わが家は、経済的に大変困窮していた時期であり、高校・大学への進学など考える余裕はなかった。このようなことから、勉強をしようという気持ちも湧いてこなかった（当該10年間が、その後の小生の人生において、小生の背中に、大きな十字架として重くのしかかってきて、大変な重圧であった。正に、後悔の念にかられた）。

とりわけ、進学校である伝習館の同級生のみなさんには、多大なご迷惑をお掛けしたと思う（みなさんが、勉強しようとする意欲に水を差したのではないかと思っています。反省しています）。

(2) 大学生時代

京都のD大学1回生（京都では1回生と呼ぶ）のとき、法学部であったこともあり、勉強の面白さに少し気づいたようである。しかしながら、大学に何とか入学したものの、実態は4年間アルバイトの連続で、学費と生活費の稼ぎに没頭していた。

また、入学当初、奨学金など程遠いものと思っていたが、入学早々、日本育英会の奨学金制度があることを、はじめて知った。記憶は定かではないが、1回生の前期授業に係る履修科目の平均点が85点以上であれば「特別奨学生」、85点未満（最低点は不明）が「一般奨学生」であったと思う。85点にほんの少し不足していたため、残念であったが、一般奨学生となった。

1・2回生のときは、京都のK大学の大学院法学研究科に行きたいと、心の中で漠然と考えていたようである。3回生に進級するにあたり、ゼミに入るための試験があり、法学部の超難関ゼミであったTゼミを目指し、無事入ることができた。このとき、「やればできるな」と、変な自信が芽生えてきたようである。

残念ながら、3回生の終わりには、「T大学法学研究科」への進学は、勝手に能力不足と自ら判断し、またより良い生活を求めて、就職することに決めた。ゼミのT教授から、就職にあたって、紹介状を書いてもいいよと申し出があったが、自分の力だけでやりますと伝えた（後で後悔する）。

このようなことから、4回生に入り、就職活動を行った（当時は、就職活動期間：5月1日～6月末日、入社試験：7月1日）。めでたく、第一志望のD生命保険会社に本社採用【総合職】として、入社することができた（くれぐれも誤解のないように、自分の力で入社することができたのです）。

2．社会人（ヒストリー的なもの）

翌年4月1日に、本社で一定の研修を受け（同期入社：46名）、最初の配属は熊本支社総務課であった。福岡支社勤務を希望していたが、希望が叶うことはなかった。

赴任地への移動中は、「都落ち」をしているような寂しさがあったことを、今でも鮮明に記憶している。とりわけ、JR博多駅から、在来線の特急で、熊本に向かっているとき、失礼であることを承知の上であるが、久留米駅を過ぎた頃、そして熊本の植木あたりから、急に寂しくなり、心細くなってきた（本社離任にあたり、支社勤務は2年という約束はあったのではあるが）。

2年後、予定通り、大阪本社勤務（業務部）となり、その後は、天王寺支社（大阪）、東京支社、新宿支社、大阪本社（営業企画部・営業広報課長）、上野支社（はじめての支社長）～新潟支社長（単身赴任）、京都支社長（単身赴任）、東京本社（業務本部）への転勤を経験し、最後の東京本社（業務本部）で、満60歳の定年を迎えた。

現住所（横浜市）は、34歳で東京支社へ転勤となった2年後の36歳から、30年間住んでいる。横浜から通算9年間の単身赴任をしていた。

3．「学ぶこと」を目指すきっかけ

(1) 新潟支社時代

40歳台の後半には、『勉強してこなかった』という後悔の念が、強く出ていたと思う。47歳で新潟支社（単身赴任）へ赴任した頃もそうであった。

とりわけ、こだわっていたのは、現役（定年前）時代に大学院進学に挑戦することであった。定年後であれば、時間はいっぱいあるので、これでは意味がない

と思っていた。現役をしっかりやりながら、大学院進学に挑戦することが、小生の長年の夢であった。

(2) 京都支社時代

新潟支社長から、京都支社長（単身赴任）へ赴任したのが50歳であった。引き続き、単身赴任の生活が続くことになった（家族は横浜に残したままである）。この頃も、大学院で勉強したいとの気持ちにかられ、年齢的なものからと思うが、焦り的なものを強く感じたことを記憶している。

このときに、京都で大学生活（4年間）を過ごした経験からか、何となく大学院へ進学したいとの気持ちが出ていた（大学生時代からすれば京都は2回目であるが、社会人としてははじめてである）。小・中・高・大学（とりわけ中・高は全く勉強していない）で、勉強をしていなかったこともあり、心の片隅に、「どこかで、勉強をし、ゴルフでいうところのイーブンパーで、勉強に係るもやもやを解消したい」との気持ちがあったことは事実である（さすがは伝習生なのか?）。

このとき、運命的出会いがあった。京都支社の部下であったH課長との出会いであった。

彼は、福岡県出身で（残念ながら伝習生ではなかった。福岡県の進学校から、長崎市のN大学経済学部卒、会社の国内留学制度に合格し、働きながら、神戸のK大学大学院経済研究科に在籍していた）、大変優秀な部下であった。取り敢えず、仕事はほどほどに、大学院に専念するように、内々に指示をしたのを記憶している。

小生は、彼に触発され、京都のD大学の大学院の入試説明会に、不安を感じながら行った。ただ小生は、全国区の転勤族であり、単身赴任中でもあり、年齢的にもまだ転勤の可能性もあったことから、京都での大学院進学への夢は、時期尚早と判断し、断腸の思いで断念した。

4. いざ本番（東京本社時代・定年後しばらく）

(1) 大学院への挑戦

55歳で東京本社（当時：港区汐留）に戻ったとき、何とかして、大学院へ進学したいとの気持ちが、今まで以上に強く出てきた。一応、金融機関の一員でもあったので、都内の大学を物色したところ、H大学院とA大学院に絞り込み、自宅への帰り道ということで、A大学院を受験することに決めた。また、A大学院には、希望していた金融法務コースがあった。家族へ、大学院へ挑戦したいと伝えたところ、家族全員から気持ちよく了知してもらうことができた。

受験するといっても、入試対策をどうすればいいのか迷った。試験は、レポートと適正試験（面接含む）であったが、適正試験（面接を含む）は、どのようなものが出るのかがまったく分からなかったので、金融全般の基本的なことから、猛勉強をすることにした（申し添えますが、仕事をしながらなので、平日は夜遅くまで、休日は返上し、出張時は空港の待合室・飛行機の中で）。

レポートは、事前にテーマが決まっていたこともあり、上手く書けたと思っていたので、そこそこの自信はあった。しかしながら、その後の面接時において、大きな失敗をしてしまった。担当の先生は3人（後日、すべて教授であることが分かった。）であったが、その中の1人の先生（D教授）（後日、分かったのだが、D教授は、法学部長兼大学院法学研究科長であった）が、FSAはご存知ですかと聞かれたので、金融庁（Financial Services Agency）であると早とちりをし、堂々と金融庁と答えてしまった。

D教授曰く、FSAとは、英国の金融サービス市場法（Financial Services and Markets Act 2000）のことで、このことを聞きたかったとのことであった（当該FSAは、わが国の金融商品取引法制定において、多大な影響を与えた法制であることが、修士課程に入ってわかった。面接時にはまったく知らなかったことである）。

したがって、基本的なことで大失敗をしたことで、不合格であろうと覚悟を決めていたのであったが、ダメ元と思い、大学に行き、大学院掲示板に、『合格』と、小生の「受験番号○○○○○」があったときは、正直驚いた。多分、小生が年長者であったので、大学側のご配慮があったのではと、当時も現在も思っている。深謝!!

(2) 修士課程時代（2年間）

面接時のD教授が、今日まで、ご指導いただいている先生であり（会社法・金融法の権威である）、また金融商品取引法の研究のきっかけを提供していただいたご高名の先生であり、小生のもっとも尊敬する先生である（D教授との出会いで、金融商品取引法が専門となり、今日まで続いている。）。

修士課程の2年間、よく働き、よく勉強したと思う。修士課程の入試前と同様で、出張時には、空港のロビー・飛行機の中で、平日は帰宅後深夜まで、休日は家族サービスをほぼ返上し、勉強していた。（同期の伝習生には少し罪滅ぼしができたかも）

修士課程1年生終了時には、学業成績が優秀であったとして、思いもかけず、学長室において、表彰を受けることとなった。表彰状（楯）と副賞（金額があまりに大きく非公表としたいが、年間授業料の半分程度）をいただいた（受賞者は小生を含んで5人程度ではなかったかと思う）。

表彰式が始まる前、突然、D教授から、表彰式終了後、法学部長室に来るようにとのご指示があり、何事かなと思いつつ、法学部長室を訪問した。

ソファーに座るなり、D教授から、ところで「今後どうされますか」と、いきなり言われたので、言われていることが理解できないまま（正直、理解不能の状態であった）、2年生では修士論文の執筆があることもあり、「修士論文」に専念しますと伝えた。そうしたら、「その先ですよ」と言われたので、その先とはと聞き直したところ、D教授から、「ドクターコース」のことです。ドクターコース（以下「博士後期課程」という）に挑

戦しませんかということであった。

博士後期課程はまったく考えてはいず、修士課程の修了で大学院は終わりと考えていたので、D教授へどのようなことを言ったのか、記憶にない。

D教授からは、修士課程2年生の夏にも、博士後期課程に挑戦しませんかとのお誘いがあった（これが2回目のお誘いである）。

また、10月にも、大学で大きな式典があるので、千代島さんも出席されませんかとお誘いをいただいた。当該式典に、ある方をご来賓としてお呼びしており、千代島さんの仕事にも関係があると思うので、その方を紹介しますよと、言われた（これが、最終的な、とどめを刺されたお誘いとなる）。

ある方とは、小生もよく知っている方であったので（どのようなポストにあったのかを含めて）、改めて驚きを隠せなかった。氏名を出すことはできないが、金融業界では大変なご高名の方である（ただしOBではあったが）。

翌11月に、大学において盛大な式典があり、小生も当該式典に出席することとなり、D教授から、注目の「ある方」をご紹介していただき、名刺交換し、しばしお酒を飲む機会を得ることができた（小生はまったくお酒を飲むことができないが）。

これで、D教授から、最後となる（3回目）博士後期課程への挑戦のお誘いであったのである。D教授には、この場で、挑戦しますと約束したのである（本当にとどめを刺された）。博士後期課程への挑戦については、後述とする。

修士課程修了時には、最優秀成績賞の栄誉に浴し、大学院生修了式（修士課程・博士後期課程合同）において、修了生代表として壇上に上がり、答辞を読み上げた。当日は、修了生もさることながら、大勢の先生方および保護者の方（小生は年長者ではあるが、保護者は妻であった）のご臨席のもと、5分程度、答辞を読み上げた。小生は、妻・娘が会場にいる中で、堂々と振る舞ったようである（他の人の話として）。修了式後、関係する大学職員の方から、「中年の星」ですねといわれ（本当は高年の星と思うのですが）、ニンマリしたことが記憶にある。

檀上には、恩師のD教授が大学院法学研究科長としてご着席されており、答辞において、「娘から、お父さんは頑張っているね」とのフレーズを読み上げたとき、小生は、一瞬、涙した。そのとき、D教授が檀上で労わるような笑顔で、小生に頷かれていたことを鮮明に記憶している（D教授は厳しい方であるが、情のある方でもある）。

また、後日談であるが、一人の修了生から、「あのフレーズは感動的でした」といわれ、何ともいえない気持ちであった（別に意識していたのではないが、娘が言ったことを、単に答辞の中に入れたに過ぎなかったのだが）。

これも偏に、D教授はもとより、家族のお蔭である。深謝!!

これで、待望の法学修士号を晴れて取得、万歳!! 本当に万歳である。

(3) 博士後期課程への挑戦

さて、博士後期課程に挑戦したのは、修士課程2年の終わりである。挑戦者は同期の中で3人のみであったが、3人すべてが見事に合格したのである。

博士後期課程の受験対策としては、語学が必須であったので、自分なりに猛勉強をしたと思っている。とりわけ、金融機関（金融用語を含む）に関わる単語を中心とした勉強をした（小生にとって、この辺りが、高校受験・大学受験の心境であったのではないかと思う）。

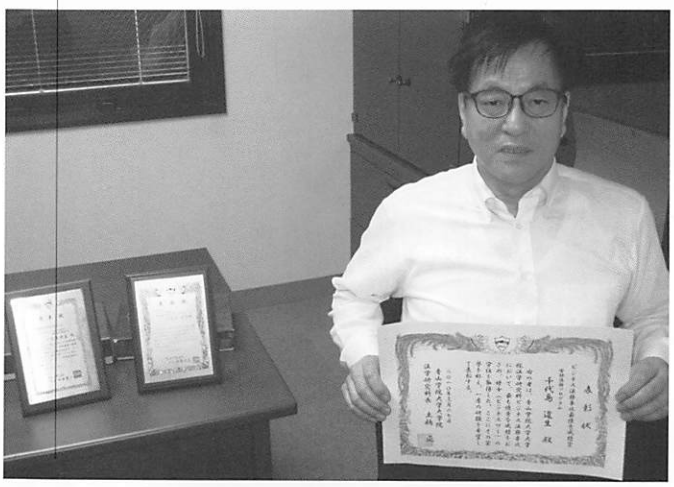
小生は、語学が気になっていたので、多分不合格と思っていた（多分、小生は修士課程同様に年長者であったので、お情けで合格したと思っている）。

小生以外の現況は、1人（男性）は霞が関に勤務しており（高校は愛知県No.1の進学校）、もう1人（女性）は都内S大学の助教の任にある（高校は岐阜県No.1の進学校）。小生とは違い、両名とも、大変な秀才であったので、色々と教えていただいた。

(4) 博士後期課程時代（5年間）

結論からいえば、博士後期課程は、3年間で所定の単位取得し、満期退学をした。また、3年修了時においても、3年間の学業成績が優秀であったとして、学長室で表彰を受けることとなった。表彰状（楯）・副賞（これも、金額が大きくて非公表としたいが、修士課程のときと同様、年間授業料の半分程度）をもらった。当該表彰も、想定外のことであり、これも年長者へのご配慮であったと思っている。

博士後期課程在籍中には、8本の論文を書き上げることができた。本当に、この5年間も、よく勉強したものである。小生にこのような向学心があったとは、夢のようである。さすがは、伝習生である。



5. おわりに

在職中（定年前）の修士課程（博士前期課程に相当）・博士後期課程への挑戦には、本当にこだわった。いつも思うのだが、中・高時代に、このような向学心があれば、どのような人物になっていたかと。今より、ましな人間になったのではないかと思う（その逆かも知れないが）。

小生の向学心は、中・高・大学時代ではなく、中・高年時代に出てきた。結果論としては、中・高年時代であってよか

ったと思う（ただし、知力・気力・体力は間違いなく衰えているので、若い人に較べて数倍の努力が必要）。

年齢を重ねて（何歳時かは不明）からの勉強も、いいものです。年齢を重ねた人は、勉強するという面では、本当に真面目である。若い世代の見本になる筈である。小生も、少しは影響を与えたのではないか。

これでやっと、中・高・大学で、勉強していなかった約10年間を、大学院（通算7年間）・教員（3年間）を通じて取り戻せたのだから、思い残すことない。

いうまでもなく、勉強は、これでおしまいということではなく、今後も引き続きやっていくのであるが、要するに、肩の荷が下りたということである。

この10年間は、本当によく勉強したのではないかと思う（まだ、現在進行形ですが）。ここまでやってこられたのは、D教授をはじめ、多くの教職員の方、大学院の同期・後輩の支援、それと家族の支援があったからである。ここで、改めて感謝したい。とりわけ、妻には感謝をしたい。

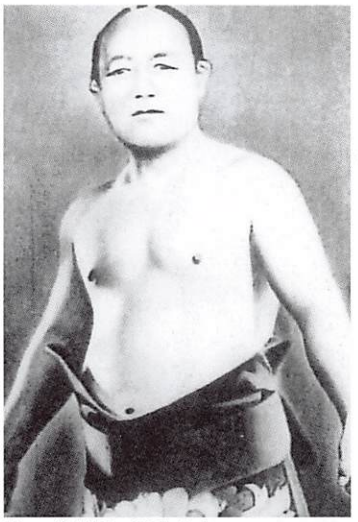
忘れていました。大学では、小生は先生と呼ばれている。以前は、先生と呼ばれるのが嫌でたまらなかった。最近では、却って、心地よさを感じている。小生は、学生と接しているときは、いきいきしているようである。とにかく楽しい。毎回、講義用レジュメは、30～40頁（A4サイズ）程度作成している。本年度の受講生は160名である（毎年、受講生は多い）。学生のみなさん、楽しみを与えてくれて、有難う。

郷土出身の第十代横綱
雲龍久吉物語

高5　下河秀行

たゆまぬ努力で第十代横綱に

雲龍久吉（旧姓 塩塚）は、文政五年（一八二二）、福岡県山門郡大和村塩塚字甲木（現柳川市大和町）で、塩塚久平治の長男として生まれる。十二歳の時、この地方に悪い病気が流行し、わずか半月の間に両親と祖母を亡くした。更に三年後には祖父も亡くした。身寄りがなく弟や妹の世話などして苦難の少年期を過ごしている。人並はずれた体格の持ち主であった久吉は、田畑を手伝い、馬の手入れなどをしてお金を稼ぎ、生まれつきの力強さは大人に負けないほどで、村一番の働き者の青年であった。十六歳の時、地元矢部川改修工事の人夫として働き、天秤棒で担いで二個の大石を運び、村人を驚かし、「雲龍の力石」として、今でも甲木の海童神社に祀られている。二十歳の時、大相撲興行がお隣の今福村（今のみやま市高田町）であった時、技はなく、つまみ押し出す力相撲であった。次第に相撲に興味を持ち出して師匠について練習を始める。師匠の度重なる説得で、天保十三年（一八四二）二十一歳で、大坂相撲で六代・陣幕長之助親方のもとで修行した。七月には大坂・雲龍久吉として付け出された。弘化四年（一八四七）、雲龍は江戸相撲、四代追手風喜太郎親方の門下に移った。江戸相撲初土俵にもかかわらず、十一月には、西幕下二段二十五枚目、雲龍久吉として付け出された。同時に柳河藩お抱えの力士となった。嘉永四年（一八五一）、親方に認められ娘コマと結婚し、養子になる。雲龍三十歳、コマ二十三歳の時であった。


第10代横綱　雲龍久吉

文久元年四十歳の時、第十代横綱に

嘉永五年（一八五二）二月、三十一歳の時、ついに東前頭七枚目に付けだされ、待ち望んだ新入幕を果たし、八勝一分の成績で初優勝に相当する成績を上げた。次の場所で二回目の優勝し、この後、勢いは止まるところを知らず、嘉永六年（一八五三）十一月、前頭筆頭に進み、四場所連続優勝を全勝で飾るという輝かしい成績を残している。安政三年（一八五六）正月、四勝一敗一預かり、翌年十一月には七勝一敗で六度目の優勝を飾り、大関に昇進した。それまでの立派な成績が認められて、文久元年（一八六一）九月、四十歳の時、吉田家（かつて、横綱の免許を発行することが出来る家）より「横綱免許」が授けられた。雲龍は横綱になってから、文久二年（一八六二）八月三日から三日間の凱旋興行を地元三柱神社（現柳川市三橋町）の境内で行っている。いよいよ「横綱・雲龍久吉」の土俵入りがあり、十代目横綱として故郷の人々の前で土俵入りが出来てとても名誉なことで、この日の興行を一目見ようと一説には一万人の観客があったと言われている。久吉の土俵入りスタイルは、「雲龍型」と呼ばれ、攻めと守りを同時に表現した形で、横綱の結びは一輪で、「雲龍型」は型の美しさから、後世に多くの横綱が土俵入りの型に選び、雲龍の名前は現在まで引き継がれている。現在も大相撲土俵入りで、お馴染みとなっており、最新では、横綱 稀勢の里関も土俵入りは、「雲龍型」を取り入れている。文久二年（一八六二）十一月、六勝一敗一引き分けの成績で七回目の優勝を飾る。その後、元治二年（一八六五）二月、全休場し、この場所限りで引退している。横綱在位五年八か月であった。四十四歳という年齢の問題もあり、親方であり養父である追手風が亡くなり、自分が年寄・五代追手風親方を継がなければならなくなったからである。

四十四歳で年寄五代追手風親方に

引退後は、相撲会所（大相撲を開催している組織）内で、重要な地位についていた。雲龍の江戸相撲での生涯の成績は、三十三場所、一八二勝（うち全勝二回）、四十五敗、十六引き分け、取り組

み勝率は、八割二厘であった。明治二三年（一八九〇）六月十五日、東京都墨田区石原の自宅で生涯を閉じる。享年六十九歳、法名を「雲山玄龍居士」と称し、海蔵寺（東京都文京区向丘）に先代とともに眠っている。昭和三十年（一九五五）八月、東京海蔵寺のお墓から遺骨の一部を分けてもらい、郷土・甲木の生家近くに「十代横綱　雲龍久吉の墓」を作っている。地元柳川市大和町では、平成五年（一九九三）、「雲龍の郷」を建設し、敷地内に「雲龍館」と「相撲場」をつくり、第十代横綱・雲龍久吉の功績を伝えている。また海童神社には「雲龍の力石」と、雲龍が寄贈した一対の灯籠と鳥居がある。

喜寿前祝同期会 イン柳川

高12　野片義人

あれから56年思い出の青春同窓会を5月25日（木）故郷柳川の御花で開催しました。〝もう待ちきれんバイ〟との全国各地からの同窓生からの要望に同窓会代表世話人の町野彰君が発起人となり多数の同窓生のご尽力、ご協力により開催することが出来ました。

12回生535名中172名もの多数が出席という盛会のなか、記念写真撮影後開宴に先立ち、すでに鬼籍に入った74名のご冥福を祈念し黙とうしました。

3年生時のクラスごとに設定されたテーブルで伝習館での青春時代の思い出や卒業後56年間のお互いの自分史の披露や消息など話題は尽きず、アッというまに時間が過ぎました。最後に「伝習館高校校歌」「白雲なびく雲仙の～」「故郷」を全員で合唱し、12回生の絆を確認しました。

閉会にあたり、代表世話人から当初77歳の喜寿の時に開く計画だったが2年繰り上げたので今回の同窓会をもって終わりにしたらどうかの問いかけに対し、大多数の出席者から喜寿を祝う同窓会開催の強い要望があり、お互いの再会を約束しました。

別屋に設けられた二次会では、〝あんた56年前と顔変わらんね〟、〝あんた名札見ないと誰か思い出せなかったよ〟など和気あいあいのなかアルコール、カラオケ、歓談等楽しいひと時を過ごし、お互いの健康を祈念し散会しました。

今回の同窓会は還暦同窓会以来15年ぶりでしたが想像以上の同窓生が北海道、関東、関西、中国、九州等全国から集まり（前回224名出席）後期高齢者の仲間入りの年齢となりましたが、暦年齢に関係なく、〝生涯青春、一期一会〟をモットーにこれからの人生を過ごして行く事の大切さを教えてくれた同窓会でした。

最後となりましたが、町野君はじめ多くのお世話頂いた皆さんに感謝とお礼申し上げます。2年後の喜寿での開催よろしくお願いします。埼玉県在住のためお世話になるばかりで申し訳ありません。

伝習館高校第12回生 第5回あれから56年〝思い出の青春同窓会〟H29.5.25

告知板

◆歌舞伎・長唄の会

連絡先＝高木節子（高 14）　TEL　080・3273・6460

長唄三味線の第一人者としてご精励の杵屋勝国さんは伝習館高校の同級生です。それがご縁で勝国師率いる杵勝会を応援しています。勝国師が歌舞伎界では坂東玉三郎の立三味線を務めていることから、歌舞伎鑑賞も楽しんでいます。

来年４月には長唄杵勝会全国大会も歌舞伎座で開催されます。ご興味のある方がいらしたら、高木までご連絡ください。ご案内を差し上げます。

◆柳泳会＝水泳部 OB 会

連絡先＝北島正常（高 21）　TEL　090・5532・0323

柳泳会は伝習館水泳部の東京 OB 会です。20 数年前から OB が集まって会合を開いています。かつては日米対抗（淵上純治）、国体１位（待鳥啓三）、メルボルン五輪（古賀学）で活躍された錚々たる方々が参加されていましたが、いまや鬼籍に。最近は全国制覇、高校日本一組の一人、酒井清行先輩を中心に柳泳会を開いています。伝習館の一角にあった名物プールは埋め立てられ、水泳部は廃部になっているとか。東京同窓会に水泳部の後輩諸君いましたらご一報ください。思い出を語りましょう。

左から北島、古賀、酒井、藤丸、田中正、田中達（手前）

◆東京陸競会＝陸上部 OB 会

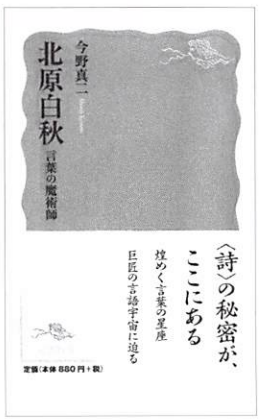
連絡先＝吉開（よしがい）孝人（高 28）　TEL　090・1254・9305

中学 55 期の江崎和夫先輩を会長に毎年１、２回伝習館陸上部の OB 会を開催しています。昭和 28 年の女子全国大会の優勝メンバー、岩丸絹子、古川美津枝、城島祥子、福山さくらさんらも在京で、参加され、新旧交わり、楽しくやっております。陸上部 OB はどうぞご連絡ください。

写真は左手前から時計回り順に、池上（高 35）、高椋（33）、塩塚（28）、高巣（20）、関（３）、江崎（中 55）、吉開（高 28）、北原（22）の各位。女性先輩は先にお帰りになった後で、皆さんかなり出来上がっております。

新刊紹介

「北原白秋　言葉の魔術師」　今野真二著　岩波新書



童謡、短歌、象徴詩、童話、紀行文と様々なジャンルで名作を残した近代文学の巨匠、北原白秋。白秋は形式に固執せず、自由に表現することを信条としていた。清泉女子大教授で日本語学者の今野真二氏が珠玉の言葉の背景、白秋の言語宇宙の秘密に迫る。

「柳川藩　立花家中列伝」　原達郎著　柳川ふるさと塾

変遷を繰り返すも戦国時代を生き抜き、改易されながら柳川、三池を治める大名に返り咲いた立花宗家。その立花家を支えた家中 200 家の物語。家臣だけでなく、医師、鍛冶、商家、写真家、力士も紹介されている。柳川ふるさと塾の塾長を務めた原達郎氏の著作。

学年だより

高志会（高四卒同窓会）
～この年22人参集！

高4　渡邊　喜亮

新制伝習館高校一期生、高四回卒の同期会もついに東京だけになってしまいました。卒業したのが１９５３年（昭和28年）ですから、もうそれ以来65年も経ってしまったわけです。あらためて想いを馳せると、戦後の学制改革のあおりを真面に受け、当時の教育環境は最悪、問題が多々あったように思います。しかし、いまは往時茫々、ただただ懐かしい思い出だけが蘇ってきます。

平成29年の同期会は、10月26日、前年と同じ上野「旦妃楼飯店」で開催しました。ここは、高歌放吟ままならぬ従来の会場とちがって、仕切も堅固な地下の宴会場で、他に遠慮する必要がないのが取り柄です。

これまで、会場選定が悩みの種でしたが、以前の桜の時期の「グランドパレス」だけにはいまだに感謝の気持ちで一杯です。昔、東京電力で直接の上司だった小野隆さんが、故あって、九段のホテルグランドパレスに移り、後年、社長に就任されたのですが、支配人に指示頂き、わが高四卒の会にはずいぶん便宜を図ってもらったものです。ついでに、その前後のことも少し振り返ってみますと、古くは銀座の「クルーズクルーズ」や千鳥ケ淵の「福岡會館」なども記憶に残り、ほかには、水野圭介君が終身会員であることから、有楽町の「日本クラブ」の宴会場なども利用させてもらったことがあります。

その後は少しばかりグレイドアップ、２０１２年「上野精養軒」、２０１３年日比谷公園「松本楼」と有名レストランの歴史と伝統に魅かれ会費の高騰を招いてしまいました。さらに、２０１４年の傘寿記念の会では、特別豪華に…ということで、友人に頼んで、「綱町三井クラブ」を利用させてもらうことにしました。コンドル設計の品格ある建築と和洋の庭園の素晴らしさを満喫してほしいと考えたのです。翌年の高志会もこの三井クラブで、九州、大阪、名古屋から11名の参加を得て、総勢35名が集うという近年にない盛会となりました。（会報17号の荒井君の報告を参照）しかし、少々背伸びしすぎて…格式高すぎ、少しばかり分不相応…との声も漏れ聞くこととなり、一昨年から現在の会場に路線変更した次第であります。ほかの学年の皆さんはどのようにしているのでしょうか。

クラス幹事の皆さんにはお手数をおかけして、従来の最終出欠確認のほか今回から開催案内状や返信はがきなどの送付もすべてお願いすることになりました。お蔭で、それぞれ私信も封入して出席を慫慂するほか、欠席者の動静把握にも当たっていただくことになりました。現在のクラス幹事は吉田佐紀子、中川彪、椛島啓之、富永たか子、緒方常子の5人の皆さんで学年10クラスを受け持っていただき、九州など遠隔地については、交流の広い筆まめ荒井健之輔君に引き受けてもらっています。じつは、5月に、残念ながら、クラス幹事の一人であった高須信治君が急逝しました。同君は椛島君の「鳳龍会館」（九州工大の同窓会館）で毎月開催している同期の囲碁会「一木会」の常連で、ついこのあいだまで元気に対局していたのに…とこの上もなく寂しい思いであります。

次、懇親会の報告に移りましょう。当日はそれまでの悪天候がふっきれて、絶好の秋日和となりました。三々五々集まるなか、某君曰く、「若い連中も同期会あんまりやっとらんげなが…よう続いとんなあ！」。確かに、毎年二十名を超える同窓生が、なんとか元気に顔を合わせられるのも、いまの世でこそ…と、感謝の気持ちなくしてはいられません。ただ齢、疾うに八十をこえた今、年月が…時間が…加速度的な速さで過ぎ去っていく切迫感も覚えています。それゆえにこそ、これから、高志会も幾度開催し得るか些かの懸念はありますが、続く限り一会の機会を大事にして参りたいと願っています。

今回、男女それぞれ11名づつの22名が参集。福岡からは、山の上ホテルを経営していた桝永知明君、福岡逓信病院の院長だった本村正治君、また、柳川からは、永年教職にあり教育委員も務めた森茂子

前列左から　荒井健之輔　渡邊喜亮　森茂子　野田美奈子
吉田佐紀子　緒方常子　井上真砂　倉本博子　高江茂子　中川彪
森本文子　掛札照子　桝永知明　大津留孝
後列右から　椛島啓之　堤隆晴　福山恭輔　石橋安男　今村啓爾
富永たか子　今村小春　（なお本村正治君は撮影前に帰福）

さんにはるばる参加いただきました。

例年通り、まず渡邊喜亮が開会挨拶を行った後、森茂子さんの音頭で乾杯、その後の宴会は練達の倉本博子さんに今回も司会をお願いしました。中途で順次各人の近況報告を聞きながら歓談。各クラス幹事からは欠席者の動静についての報告もありましたが、何人かは病気など老齢ゆえの不自由な状況にありどうも再起を望めない模様であるのが気がかりなところであります。

その後の余興には多士済々、予めお願いしていた富永たか子さんの自作詩の朗読に始まり、荒井健之輔、中川彪、堤隆晴君など演歌披露があり、さらに福山恭輔、石橋安男、大津留孝君なども加わり、久々にカラオケ熱唱が繰り広げられ、まこと3時間余のにぎやかな懇親会となりました。最後の校歌斉唱「星座よ輝け」は例年通り荒井君のリードで締めと致しました。

このあと西郷銅像のそばで記念撮影…次の大河ドラマを前にして、はやばやと上野の「西郷（せご）どん」に会ってきた我々でした。

（渡邊喜亮・記）

高6回（昭和30年卒）だより「三稜会」

高6　石橋　修

4月12日、遅咲きの桜が僅かに残っている春の好日、銀座のお寿司屋に同期11名の男女が集まりました。2年に1回開催する三稜会です。これまでは、私たちの卒業式があった3月6日か、その前後の日に三稜会を開催していました。しかし、流石に傘寿を超えますと3月初旬では、まだ、寒いと言う声が、高まって来ましたので、陽気の良い4月中旬の会合となりました。

型どおり、川口鍵寿郎君の会長挨拶で始まり、高木健君の乾杯の音頭で開宴しました。

司会進行役の池田勝嗣君のリードで雰囲気も盛り上がり、各人の近況報告は長短さまざまでしたが、久し振りに出席した古賀穣次君は質問攻めに遭い、応答に大童でした。

それぞれ一人ひとりの八十路への道程が有り人生が有り、同じ学び舎で3年間過ごした同期の者同士が、時に集い、お互い語り合うということは大変味わい深いものがあるものだと思いました。九州・久留米から出席してくれる岡田哲也君は今回も颯爽と元気な姿を見せ、全員にギリシャ産のオリーブオイルを持ってきてプレゼントしてくれました。伝習館東京同窓会に毎回寄贈している品物で、抽選で15人～20人に1人しか当たらないのに、三稜会出席者は、みんなが貰えるので、有難く嬉しく頂戴しました。

また柳川の古賀勇生人君から「郷里の産物を存分に味わって下さい。」と色鮮やかなデコポンと有明海のノリをドッサリ送ってくれました。みんなで分けてニコニコ顔で持ち帰りました。当日は、各家庭で柳川の懐かしい話に花が咲いた事でしょう。古賀勇生人君ありがとう。

時間と歳を忘れて話に夢中になるうちに、予定の時間になり、また元気に合いましょうと楽しい同窓会を散会しました。

写真は前列、左より　石川　修、木村（松本）峯子、池田勝嗣、古賀穣次、菊次（山浦）伸子
後列、左より　岡田哲也、戸上軍治、川口鍵寿郎、田中　稔、森　清旨、高木　健　（敬称略）

高9回生同期会「むつごろう会」喜寿の集い

高9　廣松　洋一

「むつごろう会」は、四十数年前、高卒9回生だけの小規模会員で始めました。

その後、伝習館を卒業していなくて

出席者の写真

上段
高橋雅子
堀添幹子
田北由利
宮川三津子
堤泰充
津留昇
岩丸純芳
堤悦夫
北原久也
木村博子
石橋淑子
原田光紀
石瀬籌子
平田喜勝
境延昭
廣松洋一

下段
古賀紀年
松尾俊之
真鍋純久
町島和子
福山幹子
野口圭明
渡辺淑子
楢橋悠紀
沖弘子
大畑靖子
櫻井晶子

以上27名

も、柳川市内を含む周辺の小中学校を卒業した同期なら、だっでんよかばんもをモットーに規模を拡大してきました。学年幹事・原田光紀君を中心に、不定期に会合を重ねて、現在に至っております。

私達も、長年それなりに生きてきて、とうとう喜寿を迎えました。昨年、数人の食事会でこの節、人生の節目になっても、子供が親の長寿を祝う会をもうける家庭は少ないだろうという話から「むつごろう会」でお互いに祝っちゃおうということになりました。

今回の会場は、虎ノ門の霞が関ビル35階にある東海大学校友会館を選びました。年齢を考え、天国に近い場所の発想です。

懇談会は、学年幹事の挨拶、柳川から駆けつけてくれた、平田喜勝君の乾杯でスタートしました。何分、二十数年ぶりの出席者もいて、大いに盛り上がりました。

今回の同期会のテーマのひとつで、年齢的にやってくるであろう認知症について、出席の現役医師、野口圭明君に〝認知症にならない生活のあり方〟の講演をワイン一杯の報酬でお願いしました。さすがに身近なことなので静かに聞き入りました。

二次会を同ビルの地下のカフェで行い、春限定のスイーツ等を楽しみました。そして、三年後に傘寿の会をやることを確認して、それぞれ新橋方面に散って行きました。

尚、共同幹事として活躍してくださった石瀬籌子さん、木村博子さん、北原久也君、三氏に感謝いたします。

2017－10－29　東京都港区赤坂　山王保険会館（木都里亭）

高12回同期「くっぞこ会」

高12　小野アケミ

10月29日（日）正午、台風22号接近で、大雨が降る中、恒例となった34回目の「くっぞこ会」が赤坂・木都里亭にて開催されました。参加者は遠路からの4名を含め32名。5月には柳川で「喜寿前祝同期会」（参加者１７２名）が開かれ、くっぞこ会からも大勢が参加した年です。東京も皆さん、高12回の同期会である「くっぞこ会」を毎回楽しみにしていただき、齢を重ねてきています。

本会で盛り上がったあと、二次会は近づく台風を気にしながらも20名が参加。楽しい時間はあっという間に過ぎ、午後5時近く、皆帰路に就きました。

平成30年秋の「くっぞこ会」はお休みとなります。今年5月13日（日）、ホテルグランドパレスで開催される東京同窓会総会で、皆さんとお会いしたいと思いますので、よろしくお願いします。

東京21会

高21　西原　正道

残暑もまだ厳しい8月20日、古賀健一君に会場（大久保の「桜華楼」）を押さえてもらい、東京21会を開催しました。卒業同期の白谷東京同窓会会長も加わり、18名（うち女性4名）が参集、皆で近況を語り、また思い出話に花咲かせました。

当初は数人から始まった在京の21回生の会も、横へのつながりができ、参加者が次第に広がりました。5月に行われた同窓会親睦会には20名近くが参加しています。スマホで直接呼びかけているのですが、皆さん反応がよく、ＳＮＳ世代に後れをとっていません。転勤組も落ち着くところに落ち着き、またリタイア組は時間に余裕ができたことも寄与しているようです。

21回生は60半ばの前期高齢者ではありますが、気持ちは40～50代といったところ。閉会後、席を移したカラオケルームでも夏ばて知らず、元気なところを見せておりました。

10月半ばには池末満君が国立新美術館で開催された「第85回　独立展」に審査、作品発表のために上京。21回生たちに本人の絵をはじめ、展示作品を解説してくれました。気が遠くなるような細かい表現で２００号の大作を描きあげた池末君には、逆に元気をもらった次第です。

幹事・西原正道への連絡先＝０７０・１３８６・２４８６

ふるさと瓦版

立花宗茂 闇千代 NHK大河ドラマ招致活動開始

九州を代表する武将、立花宗茂とその妻闇千代は、小説はもちろん、アニメやゲームでも題材に取り上げられるほど、世代を問わず高い人気を誇ります。2020年は、立花宗茂が大名として柳川の地に返り咲いて400年の記念の年。市はそれに合わせて、立花宗茂、闇千代のNHK大河ドラマ招致活動を始めました。市観光課観光推進係（☎77・8563）

立花宗茂（1567～1642）は、豊臣秀吉のもとで手柄をたてて、柳川城の城主になり、一時期、領地を失ったものの柳川藩主に返り咲く。一度領地を取り上げられた大名が、再び元の領地の大名として復活したのは歴史上宗茂のみ。上の肖像は宗茂13回忌のために制作されたと考えられる。

闇千代（1569～1602）は、7歳のとき父・戸次道雪から家督を譲られ、立花山城主となる。歴史的に女性が城主となったことを史料で確認できるのは闇千代のみ。13歳で宗茂を婿として迎える。上の肖像は江戸時代前期に制作されたものと考えられる。

九州動乱期を協力して乗り越えた宗茂と闇千代

立花宗茂は、豊後の国（現在の大分県）の大名だった大友宗麟の家臣、高橋紹運の子として誕生。一方、闇千代も、大友宗麟の家臣、戸次（立花）道雪の1人娘として生まれます。道雪には男子がいなかったため、闇千代は7歳にして、立花山（福岡市東区、新宮町、久山町）にあった立花山城主になります。1582年、宗茂は道雪の婿養子となり立花山城主に、闇千代はその正室となります。

宗茂は、豊臣秀吉の九州平定で活躍。秀吉は宗茂を「東の本多忠勝、西の立花宗茂、東西無双」とたたえ、筑後柳川に13万石の領地を与えます。しかし1600年の関ヶ原の戦いで豊臣方の西軍についた宗茂は、領地を追われ、浪人の身となります。

宗茂が大名復帰を願い京都に上ったのは1601年。しかし闇千代は、夫の大名復帰を見ることなく、翌年肥後の地で亡くなります。その後、宗茂は、2代将軍徳川秀忠から信頼を取り戻し、1620年、20年ぶりに柳川の地に大名として返り咲きます。宗茂は翌年、闇千代の菩提を弔うために、現在の西魚屋町に良清寺を建立しました。

なぜ2020年に2人の大河ドラマなのか

2020年は、宗茂が柳川に復帰してから400年の記念の年。また、来年の大河ドラマの舞台は幕末、再来年は近代にすることが決まっており、2020年は戦国時代となる可能性が高いこと。さらに、宗茂と闇千代には、父子の絆や信義を通した生き様、西日本一の武将、女城主など大河ドラマと成り得るエピソードが豊富。加えて、大河ドラマで重視される時代考証では、柳川古文書館や立花家史料館で大切に史料が保存・研究されているのも理由の1つです。

7月には招致委員会を立ち上げ

大河ドラマを招致するには、地元で気運を盛り上げるための招致委員会を立ち上げる必要があります。招致委員会は、市や商工団体、県、宗茂や闇千代に関係する市町村などの他、歴史の専門家なども加わることを想定。2019年の大河ドラマの内容は昨年11月に発表されたことを考えると、遅くとも7月までに招致委員会を立ち上げ、招致活動を本格化させる必要があります。このため、市は6月開催の市議会に大河ドラマ招致関連予算を計上するなど準備を進めています。

市民の皆さん、大河ドラマ招致活動が、柳川の歴史や物語をもう一度見つめ直す機会となり、そして次の世代を担う子どもたちが柳川を誇りに思えるものとなるよう、一緒に盛り上げていきましょう。

広報やながわ2017／6・1より

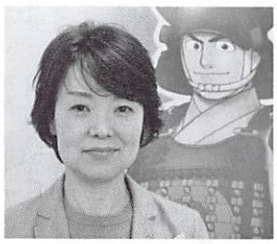
歴史を知り関心を持つことが、柳川の力に

柳川は歴史的遺産に恵まれた地。大河ドラマ招致は、柳川にかけがえのないものがたくさんあるということに気付く良い機会だと思います。

立花家史料館では、宗茂生誕450年を記念し、朗読イベント（右上写真）や12月には柳川古文書館と共同で特別企画展も計画しています。

宗茂と闇千代の人物像に触れ、ワクワクするような物語を多くの人が知れば、大河ドラマ招致の気運が高まると思います。

柳川にすばらしい歴史があることを知り、郷土に誇りを持つことが、本当の地域振興につながると思います。



立花家史料館
植野かおり館長（久留米市、56歳）

3/28 日本水産学会で高校生が発表
島添さんがウナギ復活の取り組みを紹介

伝習館高校生物部の島添有規子（ゆきこ）さん（隅町、17歳）が、3月28日、東京都で開かれた日本水産学会で、同部が行うニホンウナギ復活の取り組みを発表しました。同部は平成26年から、県の許可を得てシラスウナギの飼育と放流に関する研究を地元の住民団体と一緒に進めています。昨年12月には、放流した稚魚のうち1匹が順調に掘割で育っているのを確認。若者のユニークな取り組みに多くの研究者などが熱心に聴き入っていました。

来場者にポスターを使って研究発表する島添さん（中央）

広報やながわ 2017.5.1

ウナギと共に
つなぐ保護機運
産卵目指して飼育工夫
効果的な放流

生物実験室に並ぶ22個の水槽の中を、体長10㌢ほどの小さなウナギが元気良く泳ぎ回る。「これなら自然界で生きていける。放流サイズです」。福岡県立伝習館高（柳川市）生物部顧問の木庭慎治教諭（52）が、ウナギの成長に目を細めた。

同校が育てるウナギは現在、約1500匹。一昨年から九州大の望岡典隆准教授（水産増殖学）とともにウナギの稚魚を採捕し、体長10㌢程度の幼魚に成長させて順次放流している。餌は一般的な養殖用の配合飼料ではなく、天然のアカムシ。ウナギの夜行性に合わせ、日没が近づく夕方に餌を与える。放流後にウナギが環境に定着できるよう、いかに「天然に近い状態」で育てるかが鍵だ。

放流する自然環境に合わせてウナギを水槽で育てる生徒＝18日、福岡県立伝習館高

全国で行われる養殖ウナギの放流に対し、効果を疑問視する研究結果が出始めている。

鹿児島県水産技術開発センターの調査によると、かば焼きサイズの体重200㌘以上に成長した養殖ウナギは、放流しても冬を越えて再び姿を見せることはないという。担当者は「長く人の手で養殖されたウナギは天然の餌を食べられず、自然界の敵にも負けてしまう。おそらく死んでしまったのだろう」と推察する。

一方、伝習館高が天然に近い環境で育て、個体識別できるタグを付けて放流したウナギは半年後、体長や体重が増加するなど順調に成長していた。生物部の宮崎優作部長（2年）は「産卵につながるよう、いつか効果的な放流方法を提案できれば」と意気込む。

ウナギの放流は、静岡県内でも身近な活動として続けられている。焼津市のNPO「静鰻（せいまん）会」は、3年前から養殖ウナギの放流を始めた。子どもに体験を通してウナギの資源状況に目を向けてもらい、保護の機運を未来につなぐのが目的だ。望月松幸会長（51）は「ウナギを見たこともない子供もいる。放流の効果は見えにくいが、まずは知ってもらうことが大切」と語る。

ウナギ保護の“道”はどこか―。生態も解明されない不思議な魚を前に、関係者の試行錯誤が続く。それでも一歩ずつ、前に進むしかない。挑戦は始まったばかりだ。

（浜松総局・金野真仁が担当しました）

7月21日付　静岡新聞夕刊に伝習館高生物部の活動が紹介されました

美術雑誌の誌上展
木村さん（南伊豆書家）が「アカデミー賞」
タマカイイメージの墨象

受賞した「ゴリアテクルーパー」と木村さん

南伊豆町上小野の書家・木村松峯さん（81）の墨象作品「ゴリアテ・クルーパー（タマカイ）」がこのほど、美術雑誌「BIFROST（ビヴロスト）」（アートクロス発行）第22号の誌上展で「アートアカデミー賞」を受賞した。

平成以降に発表されたあらゆる分野のアート作品から、最も注目すべき約50点に贈られる賞。受賞作は2016年上旬に制作した。サメを丸のみするハタの仲間の巨大魚・タマカイをイメージし、豪快な筆使いで大きな口を描いた。木村さんは「描いているからまた賞をもらえた。生きている限りやる。師は95歳まで現役だったので、それを目指し続けたい」と語った。

7月13日付　伊豆新聞

パリの美術館に永久収蔵
南伊豆の書家・木村さんの墨象
縮小し複製 花見の人々、表現

パネルが永久収蔵される「春の宴」と木村さん

南伊豆町上小野の書家・木村松峯さん（81）の墨象作品「春の宴（うたげ）」がこのほど、フランスで行われた「ヌーボー・ジャポニスム芸術展」で金賞を受賞し、縮小した複製品がパリ12区のベルシー美術館に永久収蔵された。木村さんの作品が同館に収蔵されるのは3点目になる。

1867年のパリ万博から150周年を記念し行われた。同万博は日本が初参加した国際博覧会で、ジャポニスム（日本趣味）に火がり木村さんは「にぎやかな勢いが出ている」と語る。花びらはアクリル絵の具で描いた。

春の宴は横幅1㍍近い大作で今春制作した。太いうねる線を墨で引き、桜の花見に浮かれる人々を表現した。線は右端が跳ね上がり木村さんは「にぎ

作品は10月末まで松崎町のギャラリー喫茶侘助で展示する。時間は午前11時～午後6時で火、水曜日定休。

10月4日付　伊豆新聞

賛助金のお振込方法

① 同封の郵便振替用紙による ② 銀行振込による

銀行名 三菱東京ＵＦＪ銀行 銀行コード(0005) 支店名 駒込支店 店コード(061)

普通預金 口座番号 １０７３６７３ 口座名 伝習館東京同窓会

いずれのお振込の場合にも必ず回生又は卒業年度をお書き下さい。

募集中！

1. 表紙絵・表紙用写真
2. 原稿―伝習館ＯＢならダッデンヨカバンモ

○テーマ―自由（同窓会報にふさわしいもの）
小説・随筆・詩・短歌・俳句・川柳、絵画・写真・書など

○字数制限なし・原則※常識的範囲で（原稿用紙使用、またはワード原稿をメールで送付）
写真・絵・カット添付可

○表題・投稿者氏名・卒業回を書いて下さい。

※原則10月20日〆切

―原稿送付先―

〒１５３－００５１
目黒区上目黒３－２１－１９
伝習館東京同窓会会報局 北島 正常 行
Ｅ－ｍａｉｌ－anc54684@nifty.com
☎・ＦＡＸ ０３－３７１３－６７７５
携帯 ０９０－５５３２－０３２３

広告募集

チラシ広告

対象＝東京同窓会会員向けに製品・商品・営業内容などをＰＲ、販売したい方。

○チラシ三千部を作成し（フォーム自由）事務局宛送付下さい。
会員への会報送付時に同封郵送します。

○広告代金＝一件につき弐万円を賛助金として頂きます。

会員の皆様からも、希望業者の方をどしどしご紹介下さい。

事務局が変更になりました。新事務局は以下の通り。

〒２３０－００７３ 横浜市鶴見区獅子ヶ谷１－９－１白谷方
伝習館東京同窓会事務局 ☎０４５－５８１－８１９３（兼ＦＡＸ）

編集後記

○今回、出稿不足が心配されたのですが、多くの方にご協力いただき、締め切りの10月下旬にはほぼ出そろいました。お陰様で正月発行に漕ぎつけることができました。感謝いたします。「伝習館ドリル」を作成したので、正月休みに皆さんトライしてみてください。東京同窓会会報は同窓会会員の情報共有のほか、会員の交流の場でもあるので、同期会、同郷会、クラブ活動のＯＢ会、趣味の会などの呼びかけに使ってもらえばと思います。今回から告知板を設けてみたので、短信のメッセージでも構いません、ご活用ください。（北島）

○高８回生の学年幹事に池田孝人、一色康子（田中）のお二方が選出されました。

○事務局が変わり、新しい学生の幹事も決まり、伝習館東京同窓会もますます活況になることを期待します。

○編集委員は次の通りです。

北島正常（編集長 高21）
内山秀生（高10）
永倉素子（高10）
高巣和登（高20）
西原正道（高21）
成清良孝（顧問 中56）
江崎正直（顧問 高２）

会長 白谷政則（高21）
副会長 原田（立花）万紗子（高13）
副会長 椛島正司（高16）
発行責任者 白谷政則

「木瓜（ボケ）」

2016JGS（ジャパン・ガーデニング・ソサエティー）ボタニカルアート展入賞作品

高12　池松　博之

植物を植物学的視点から精密に、しかも芸術的に美しく描く「ボタニカルアート」。池松氏はこれまでも「百日草」「石斛（せっこく）」「バラ」「芍薬（しゃくやく）」などを出展されています。ちなみに漫画家・コラムニストとして活躍中の辛酸なめ子さんは池松氏の娘さんです。

墨象　「春の宴（うたげ）」

高6　木村　松峯（峯子）

ヌーボー・ジャポニスム芸術展金賞受賞
パリ12区ベルシー美術館永久収蔵

春を告げる鳥は、風にのって来ます。眠る大地の中まで命溢れる森。川底には銀の魚が泳いで、せせらぎの中を今日も恋を語り合う。あなたがいたから、私はここにいる。人生を振り返って、懐かしむ花々へ、蝶が口づけをして、小ウサギも祝福している。来る日もくる日も、私は励まされる。旅立ちの若人よ、栄光あれ。輪になって、懐かしい日々を踊ろう。太陽を浴びて、この場所で歳を重ねよう。そんな気持を胸に抱き、墨象で表してみました。

墨象　「ゴリアテ・クルーパー」（超巨大魚タマカイ）

高6　木村　松峯（峯子）

2017「ビヴロスト」誌上展でアートアカデミー賞受賞

「蜘蛛手（くもで）棚」
撮影・石塚武美さん（高12）

伝習館東京同窓会事務局
〒230-0073　横浜市鶴見区獅子ヶ谷 1-9-1　白谷方
TEL 045(581)8193　FAX 兼用